

黑潮

第四號

1938

黒潮

目次

巻頭言

藝術作品の評価

随想

◇

科学者批判

偶感

古きエレメントのノートより

無題

◇

哲學する事

高校生活に就て

随筆

井上寛令 (三)

伊丹康夫 (八)

岡田健一 (一九)

本間英夫 (三二)

塩谷 香 (三)

村上横治 (三)

水野謹一郎 (三七)

渡辺三郎 (四二)

オリムピックとヒロイヌム

即現実的立場

(詩)即興詩

◇

自意識

断片

來年への希望(尋常科部員へ)

◇

記録(高等科ウオター・ボロ)

競泳記録

同

府高並尋常科最高記録

編輯後記

堀内淑彦 (四〇)

中村 治 (五三)

石渡良一 (五七)

森田節男 (六五)

成合 彦 (六八)

村上保男 (七一)

(七七)

(八九)

(九六)

(一〇七)

(一〇九)

黒川

潮

第

四

號



卷頭言

「黒川」もいよいよ、第四号を迎へて一段と飛躍し、当初の意志の疎通から現今の文化的向上に迄とす、み、全国学生運動部服中最高の水準に位する様になつたのは、慶賀にたえない次第であり、吾々はこの誇るべき、而も我々に残された唯一の機関を可及的に利用すべきである。

そして之を通じて吾々は在来の運動部の概念を揚棄すべきである。吾々は職業的な水泳選手でないのであるから、水泳競技そのものは、第一美的な意義を持つてゐないのは勿論である。競技そのものは手段である。それらのものを通じて、吾々が自己の向上、互の親睦に目的を有してゐるのである。

従来学生スポーツマンに要求され、且つ価値を認められてゐるのは、所謂スポーツマンらしくと云ふのである。「スポーツマンらしくあれ、快活に明朗にあれ」と云ふことは、新聞の運動欄に、学生運動の聯盟の綱領に、此処彼処に見受ける。左しかに快活であり、明朗である事は、決して

悪いことではない。併し快活なだけが、明朗なだけが、高校の部生活に於て求められる最上のものではあらうか。より高きものへの向上を瞬時と曇も忘れてはならぬ我々にとつて、單なる快活とか明朗とか、最上のものとして要求されてゐると云ふのは、我々に對する侮蔑ではなからうか。快活とか明朗とか云はれて、小市民的なヒロイックなセンチメントに溺れてゐることこそ、最も愚劣な態度に外ならぬ。

賢明な諸君には、「黒汐」の使命が、利用価値が、従つて水泳部のそれが奈辺にあるか、推察されたことと思ふ。

文化的向上は文化学部のするところで、水泳のそれはお門ちかひだ。水泳部は水泳のみすべはよいといふ非難は、全くあたらぬ。

すべて通俗的な固定した範疇をもち来り、何事もその枠の中へ収めようとする態度からは、非建設的な退嬰的な歪のられだ行動と結果を生成せられるのみである。それ故に新たな発展の途上にある水泳部を従来の單なるスポーツマン的な運動部の範疇へ叩き込んで考へることが誤であることは明白である。

又もう一つの面から、この謬見は否定される。即ち在来かくあつたから水泳もかくありと云ふのは、論理の飛躍なのだ。存在へそれは生起するものだが、と當否とは平面のちがつたものなのである。好きだから良い、きらひだから悪いといふのが誤であると同様に、水泳部といふものは明朗に永ぐだけのものであつた。それ故に、今、水泳部が所謂文化的なものへ手出しをせしはならぬと云ふのは、的の外れた、それ自身矛盾する非難に外ならない。

吾々相互の文化的向上と心理的交流とを目して「黒汐」は今後ますます発展してゆくであらう。

既に第四号に於て、新しい目ざめた部生活の黎明の訪れを、我々は感知することが出来る。

(文責在中村)

藝術的作品の評價

井上寛令

藝術的作品が單に文學的にのみ評價されるべきものでないことは、今日では、一般に承認されてある様である。其は文學又は藝術が人間生活の反映であり、更に進んでは、指導ですらもあるから、人間生活の學問としての哲學及社會科學の資料となり得るといふ理由に基くやうである。

此事は吾々には可なり重要視されるべき事柄であると私は思ふ。理由はかうである。

第一。吾々の生活体験は極めて限られてある。然し生活体験をこぼしてしか吾々は哲學的社會科學的認識を深める事は出来ない。従つて我々は何等かの方法でかゝる生活体験の範圍を出来るだけ拡大しなければならぬ。其には他人のかゝる体験の記録を出来るだけ多く蒐集する外はない。藝術的作品の持つ意義はまさしくまづ、こゝにあるのである。

第二。藝術家の感受性は科學者のそれよりも鋭といふ。といふよりも藝術家は

彼が感受したものを直ちに藝術的作品として發表し得るが、科學者は彼が感受したものを科學的運作として發表するまでには相當の時間を要する。其は与へられた素材に科學的加工を加へて其を完成するまでには種々の科學的過程を辿らなければならぬからである。従つて或る時代の或社會生活を認識するには社會科學によるよりも藝術的作品による方が、むしろ賢明な場合がある。少くとも後者を前者の資料的意味で涉獵する事は極めて有効である。

この様に一つには吾々に社會科學的領域又は地盤の体験の拡大をもたす意味に於て、二つには社會科學的認識の前進をなす意味に於て、藝術的作品の持つ意義は、高く評價されるべきであると思ふ。

私は特に文科の諸君、將來人間生活の學問の研究に遣まれる諸君が、高校三年の生活の間に、藝術的作品の涉獵に妥頭されん事を切望する。其が高校生の最も賢明な思想生活である。

2
この事を私は古典的劃期的と云はれる科學的諸著作から學んだ。此等の著作の中には、優れた藝術的作品が陰に陽に縱横に駆使され織り込まれてあるのである。

(了)

大学へ入ると総てが変る。唯変ると云つても抽象的で判然としないが、実社会との接近度が密接になるに従ひ、我々の生活環境も一変し、それと共に我々の生活態度も修正を余儀なくされる。従つて我々の言語動作の、現実の客観社会に制約される度がそれだけ激しくなつて来る。さうして是等言語動作より生ずる影響のすべての責任は、当然すぎる程当然な争ながら、当人の負担に帰するが、而もこの場合何等余明の余地を求め得べき庇護も与へられぬ。

換言すれば我々は一方に完全に独自性を有するに至つた生活を持ち得るが、他方それ又慎重と冷静とを、更に又時には或程度の畏縮も要求されるに至るのである。

尤とも對照とする學向が極度に専門化された故もあるが、未だ〳〵高等學校時代の方が、自由な奔放な生活を持ち得て気楽なつた。だから諸君も自由活動の極限まで許された現在の生活を、思索になり運動になり、兎に角統一的な内

容を持つて可能的な極限まで、自由活動をエンジヨイして欲しい。

しかも現実に水泳部と云ふ目評と手段とがあるのだから、この点大分有利であり、恵まれてゐると云つていゝだらう。だが利用手段自由活動云々と云つても、諸君は具体的に水泳部の一員とし、一方水泳部を通して諸君の奮斗的な高校生活の或る刺戟と目標を得、他方諸君は其の努力の精華たる豊富な生活内容を水泳部に与へ、而して不滅の旗幟たる文化的向上の使命に向つて擁まざる努力をツツケ、且又此の不滅の文字たる文化的向上のもとに、尊い血統と犠牲とを払つてゐる。

而して文化的なる語は、それが抽象的なる故、各人各殊の内容を与へ、解釈を補充し、それが故に又多彩多角な水泳部の生活が実現されて来た。扱て、こゝで改まつて文化的なる語の概念分析を検討する訳ではないが、それが抽象的であり、漠然たるものであり、更に前指導者の与へた内容が、後継者が相續すべきか否かは全く任意規定であると云つても、その語は直ちに淺薄な抽に導いたイデオロギイのテマツトグスを作り上げる華や、思想上の排他的な支配を意味するもので無い事は、賢明な諸君の熟知してゐる所であらう。

だが若し眞面に、而も眞剣に人生を追求し、天才的なり其他凡ゆる眞理探求に志すべき学徒として、自由活動・文化的なる庇護の下に、かゝる一時的な小児病的ヒロイスムの捕虜となり、瞬時と雖も健全な発達の軌道から逸脱したもののか居るとするならば、かゝる人間は全く哀れむべき粗忽者と云ひ得るだらう。

それは恰も過去の凡ゆる尸史的夕流を無視して、一度に膨大な理論的体系を論ずる如き、盲目と無定見と非常識さに起因して居る。

現実の生活内容とは余りも矛盾した觀念の遊戯はそこに始まる。凡ての現象は自己の狭隘な視野の中で変形され改造され、千遍一律たる事大主義の産物を鼻にかける退嬰的態度も其処に生れる。

斯で自己への限りなき省察と、批判と現象への果敢なる直視を身上とする純粋な我々の生活信託は、且又尸史的社会的なるが故に、誇りとする我々の学的信念を若し知識人たる資格の下に、如上の如き浅薄無価値な生活内容を最上とする程、觀念化し固定化するものに變へたとするなら、注目すべき退歩と云はねばならぬ。

かゝる多分に科学的基礎を欠除した寧ろ宗教的信念に近い、土台なきものを

善意にしろ厚意にしろ、未知の将来性ある輩に押売りして、型にはまらぬ敢非時代のとなすが如き現象があるとするなら、それは機局の狭量な思考の一面的にして固定的な隈籠さから生じて来るのではないだらうか。

僕は先づ文化的なる前提をあげ、諸君が最も活動的範圍の自由な高校に於て、如何に之を善用し、而も具體的に水泳部の一員として、如何に有意義なる内容を之に与へて居るか、些か老實心に近い希望を述べた。

与へられた膨大な科目の前に、日夜呻吟して居る僕が、寸暇を利用して書きなぐつた此の雜稿は、全く非論理的で統一がない。だが唯諸君が、たとへ自由活動の可能的極限を有するとは云へ、諸君を屈縮する現実の客観的状況が、如何なる正体を有してあるか、斯又どんな思想的傾向を有してあるか、明瞭に理解し把握し得る筈だと信ずる。又諸君は現在が、思想的に社会的に、最も不安混濁たる故に、將來の爲替とい雌伏と沈黙とを保ち、ひたむきに勉学一途の生活を送るべき事の有意義を認め得る事と想ふ。

6
もし年少のものが自己の浅薄な表面を、臆面もなく露出し、謂はゞニエデマゴークスの遊戯所たる役割しか持たぬ程顛落すべきものでないことも、充分に

承知して居ると確信する。

だから諸君が若し空虚なる一個の、時代に溺れるオポチニストとして、自己慰安に輕卒なる満足を得て、社会的人間としての冷靜さと慎重さを失つたら、諸君自身のみならず、水泳部も、否今後来るべき輩に、如何に悲惨な結果をもたらすであらうか。而して今後の諸君の挙動の一切が、来るべき輩の、西水泳の次の興衰を左右するのであるから、別に今どうといふ訳ではないが、諸君の現今社会状態下に於けるよりよき慎重なる態度を希望して、やまない次第である。

そして所謂その時々の変遷的な機會主義的聖宮なるもの、実体が、僅々二十名に過ぎぬ、小社会の運用すら満足に為し得ぬものであるか。且又一見平明にして無技巧な生活が、その実眞摯を我々学徒にとつて、如何に価値あるものであるか、色々諸君並びに指導者たちの解決すべき問題があると思ふ。それには先づ文化的自由活動への再検討と、小市民的な名誉心の放棄が急務だらう。そして此れがどんな馬鹿げた事かを自覚する事が必要だらう。そして鉄の如く堅き意志と、慎重にも連絡した団結が朕々として底流をなす

水泳部独自の誇りと、水泳部の有する多數の有為な分子が、何時までも本来の進歩性を失はぬことを、衷心から希望して居る。

以上思ひ出すまゝに、冗言沫語を雑多に並べて来たが、何分にも忙中のことゝて勸余を乞ふ。寇に爾諸君の如き年輩に、往々陥り易い輕卒を思ひ上り態度を、自己の拙なき聖諭から類推して、敢て蛇足を附言したまでだが、杞憂はごたら之に越した事はない。

科學者批判

伊 丹 康 夫

「黒汐」第四号の発刊に際し、その使命の十分に達成されんことに満腔の敬意を表し、併せてこの一年間、苦業を共に、部の爲に闘つてくれた諸君の献身的な努力に、心から感謝する次第です。

又同時に僕の青春時代を意義あらしめ、或は寐しませしめ、又は憤懣及び批判能力の如きものゝ發展を助長し、この感慨に余る水泳部を去るに当り、始終御

尽力下さつた、小坂、堀内、丹次の諸先輩に、深くお礼を申上ります。又晝に夜に、僕に共力して又色々直接にお世話になつた福島、岡田、堀谷、本間の四君にも同様にお礼を云ひたい。

「黒汐」には過去三四執筆したのであるが、「黒汐」の使命に僕があまりに微力であつたことを痛感し、此処に禪一筆踊らせたいのであるが、難関を並目に控へ頭に統一が無く、あれやこれやと考へて見たのである。今夏、戸隠山中で鶯の声や、谷間の流れの音と共に解決した、不完全ではあつたが、それを此処に掲げて諸君の一層進んだ批判を乞ふ。

僕は数年前には、学者特に科学者と云ふもの、広く云へば、人生的な傾向又は精神生活の状態に、單なる観察の不足、言葉をかへれば、僕が批判研究の機会を持たなかつた身、或る程度感惑を持ち、又その概念を未だつかみ得ずにあつた。

「黒潮」第二号に於ける本間、福島両君の論説を深く思ひ出す事が出来るが、両君のは自己に對し局部より發したが、非常に卒直な行き方であつた。僕は勿論眞の科学者ではない。僕は單に自然科学者を目ざしての段階に居るだけであつた。眞の科学者の心理を知らない。故に僕は科学者の單なる社会人との差異、即ち彼等が一般に「彼は学者肌ぞ」と云はれるに至つてゐる、彼等の特殊な心理に對して興味づけられる所あつて、諸科学者の^{ネロジ}評價を参考とし、彼等の生涯の丕^ス廣をかへり見、僕の観察上よりの想像よりして得られた所のものを、この戸隠の山間の聖地より朝露に光る草葉と見くらべ、谷間のこだまに己を吟味されうゝ筆をとめた。

10
彼等を分ければ、研究家的傾向の人物もあれば、思想家的傾向の人物も居り、又双方兼ねた人物もあるが、研究家であれ思想家であれ、生れてより彼等は人類として、又は科学者としての戦を志した人間ではないか。彼等の精神の研究、極めて多様な彼等の傾向の研究、更に進んでは、彼等の性格の研究さへも非常に興味あるものだと思ふ。

僕の観察した教人の者は多くの点に於て大要異つてゐるけれども、彼等には、一方共通的特色も見出される。

一言にして云へば、動・勉・人・運であると言ひたい。これ程天分を恵まぬ凡人運でも、努力なしに天して大成しないことは明らかである。彼等の生れながらにして天稟を受けぬ人運でも天して例外はないのである。彼等の天分は却つて、彼等に補する場合が認められ得る場合は往々してある。併し彼等の勉強の仕方はいろ／＼ある様だ。中にはその人の全生涯が長い忍耐の生活であり、休まずく一歩々々と進む人も居れば、又反対に難関に遭遇すると辛抱すよくあくまで戦ひ、遂にそれを征服するやうなまはるつこい事はしないで、その難関に向つて非常な情熱を奮ひ起し、勇往邁進する人もある。或人は芸術家が自分の作品を愛するやうに、自分のした仕事を愛し、何かしら自分が命令を受け仕やうに想像し、その命令をすするけたくないと思ひ、又他人にとつて、仕事は何より先づ自分の慾する所であり、快楽であると云ふやうな顔をして居る人等あると云へやうか。

この様な差別の生ずるのは、彼等の気質がさまざまであり、性格の相違がかくして精神の相違を生ぜしむるやうになつたのだ。

又凡ての学者は情熱家である。彼等の情熱は真理に対する愛であり、科学に対する愛であり、概して外観上、沈黙的に見えるけれども、決して熱心の度が少ないわけでもない。だから或る意義に於て、信仰であると僕が考へる。「行動」うか、凡ての情熱は、信仰を前提としてのそれであると言は考へる。「行動」を起させる動力は凡て信仰である」とポアンカレは云つてゐる。しかし科学者にとつて左様な信仰と共に相対立して、批判的精神と云ふものも必要であることは、論を俟たないであらう。

又科学者の中には、物理学者、天文学者、或は数学者と云ふやうな似かよつた学向をして、又一面特殊性ある人達が居る。その精神的傾向は殆んど同じである様に思はれるかも知れないが、細かに考察して見るに決して左様な事はないと信ずる。

辛抱すよい自然現象の心理を解剖し理論化する事へのみしか信賴しない動向な人々と同時に、一種の洞見力を信賴して居り、そして必ずしもそれを悔ゆ

る必要のない直観の人達を見出し得る。或数学者達は広大なる概観のみを好むやうに思はれる。一つの結果を得れば、彼等は直ちにこれを一般化せんと夢想し、これを類似のものと比較し、一層高い段階の基石をらしめ、そこから一層遠いところを見渡さうとしてゐる。

所が或人は余りに視野を拡げることが嫌つてゐる。広大な景色はどれ程美しく感じて、はるか彼方の地平線を走る船の煙突は何本あるか数へられないからである。それ故確實な完成を目ざし、彼等は細部をよりよく観察し、即ち狭い範囲をえらぶのである。評人であるより芸術家、即ち彫刻家の如き人間であらう。

今度眞の科学者は謙遜であるに附け加へやう。如何なる傲慢な学者であるとしても、多くの二流の政治家や、新しい代議士たちより謙遜ではなからうか。もつとも政治家や代議士にとつて、謙遜と云ふ事は大要窮乏なことであつて、彼等の出生の道に相反するであらう。即ち謙遜云ひ方をすれば、多少とも高い理想をなかめて、これに自分と云ふものを引きくらべて見るには、どうしても自分の姿が小さく見えざるを得ないのであると僕は思ふのだ。しかしこれ

が自己の不信を生ずるなら問題であり、一生の仕事には自己の不信は常に邪魔になる。しかし大抵の志ある人は、かやうなところにはおち入つてゐないであらう。自分の研究、行動、仕事等の方法に信頼してゐる筈だ。大部分の学者は、彼等が、彼等自身の能力から、どの位のことを期待し得るか知つてゐるといふ事は、誰も否定し得ないであらう。又反對にそれを自慢にしゃうとは、誰も思つてゐないのである。唯それ愛して心の中又は胸の中に藏してゐるだけである。この事から多くの学者の云ふ、温和と云ふ言葉が生れて来るのではないであらうか。夫して彼等は自己の優越を鼻にかげやうとはしない。他人を厭よく受け容れて居る。

しかしそれと同時に、或る程度自己の優越を意識して居るのではなからうか。彼等の情感はたえず歡喜をあたへ、又歡喜を見出さうとしてゐるに相違ない。そして悲哀を遠ざけてゐるから、彼等は棄て家ども云ひ得るでせう。眞理に到達しないからと云つて失望はしない。そして名をはせた科学者は眞理を探究する情熱を失はないし、そこに喜びを味はひ、決して、たやすく眞理の見つからない事から、失望したり方向をかへたりはしないものだ。かのニュートンも死

に際して「——真理のきはまりない大洋は未だ研究せられずして、我が面前に横はれり」と云つてあるではないか。

今一つの特色を挙げるならば大部分学者の心情はいつも若くある。恐らく学者は他の人達程若かつた事はないでせう。が、そのかほりに、他の人達よりもずつと長い同若さを失ひはしない。そして他人の既に明らかに見える彼等の無邪気こそは、彼等の若さのしるしではなからうか。これはきつと年を老らせるものは悲哀のみであるからであらう。そして私達は学者の情熱はいつも悲しみを産まないで、歡喜を生むものであるといふことは、先に述べたばかりである。

無欲恬淡といふ事も科学者の一般的美点であると云へやう。金錢に對する欲望は彼等には殆んど常に知られてはゐない。或る場合、彼の單門的智識は、彼が欲するならば、彼をして工業界で産をなさしめるのは如何に容易であるか考へて見たい。僕等の見る科学者の中で利殖家と見られる人達は他の仲間の者との對照によつて、どの様に見られてゐるか。又どの様に批判されて居るか。十分考察せられる事である。しかし淡泊さと云ふものは、金錢に於てのみを示すものではないだらう。学者の中には勢力を揮やうとする人もあれば、これを賺

ふ人もある。前者にも理由はあるだらうが、彼等は單に自分の爲に勢力を欲するのではない。彼等の理想の爲めに之を欲するのであらう。それから又科学界にも又現世的利害を念慮とする理財家なしますますことは出来ぬ者が居る。これ即ち前者の事だ。

しかし僕は僕の理想として、又僕はかりでなく一般科学者を目指す者にして、外部の如何なる配慮にも、心を算はれずに敢々として理想に精励する後者が好ましい。又科学者は努力と同時に名誉にも淡泊でありはしないか。或る学者が幸運にも一の発見をした時を想像して見よう。一時固まのあたり真理に直面した喜びと、もに、この発見に彼の名を与へる満足はいかばかりか。しかも僕は車輪や火輪を発見した無名の発見者に對しても、世人はこの発見者の名前が知られてゐる場合と同様に感謝してゐると考へてはならぬだらうか。凡ての人々はそんな風には考へては居ない。或は少くともそんな風に振まつてはゐないと附言する必要があると思ふ。そして僕は名譽と云ふものを殆んど意に介しない科学者を見る。彼等は彼等の研究の成果を一個人の勝利としてをばないで、彼等がその中に加はつて、ともに戦つた軍隊の共同の勝利のやうなもの

して喜んでゐるのである。この軍隊の中では多くの勇敢な兵卒はちか共同の勝利に有益な貢献をしなから、名前も残さずに戦死したに相違ない。

是等の事の結果として、もう一つの必要を条件が見出される。それは大成した学者か否かを鑑別せしむる時、これは適當な考へ方であるとは断言しかねるが、その学者が後進の人達をどんな風に待遇するかを見ることである。彼等は後進の人達を目して、世人の記憶の中で消えて、彼等自身の姿を掩ひかくすかも知れない。將來の敵手と見るであらうか。後進の人達にとっては、彼等は一時は好意をよせてくれるけれども、あまりに速かに蘇々たる成功を博すると心配し、やがて気が気でなくなつて来ると、映すのではなからうか。それともその反對に彼等は後進の人達を自ら戦場を去つて引退するにのぞんで、軍令を得ふべき將來の戦友と見做すであらうか。永久的に完成されないことが前以て分つてゐる偉大なる聖業に従つてゆく役力者と見做すであらうか。彼等はこれらの後進者かしばしば遠慮がちに彼等に抗議するのさへも容れるだらうか。彼等は事實の中から法則を演習することの出来る観察者であるのだ。彼等は凡ての人が誤つてゐた事、どんな偉大な人達でも沢山の誤謬を信じてゐた事。しかも

それにも拘らずこれ等の人達は尊敬されてゐたことをよく知つてゐるのだ。

然るに彼等自身も謬ることかないと結論することは欲しないやうだ。

此所で大体蓋さるのだが、これは僕があまりに科学者の良心的な観察の結果、多少、的を外れたかも知れない。僕は或物を解する時美化しやうと試みない。又それ以外に多くのネグロロジーには、群令上かも知れないが、懐友や、役力者や、友人を失つた場合には、誰でも故人の欠点よりも長所を思ひ出してゐるやうに感ぜられたかも知れない。

結局、これは僕のあらゆる観察から統一し、解析した科学者観だ。甚だ薄学を自ら再び認識する結果であるかも知れない。諸君の考へは又異なるところがあるだらう。僕のこの学術観を反駁する所があるだらう。高校生活を終へる中に、一度はこの問題にふれて欲しい。理科生に於ては特にだ。

最後におこたわりするが、僕が並べた科学者は自然科学者の範圍としておかう。君等は「黒夕」第二号の本間君の「葉の花」とそれに応論する福島君のを読んばであらうが、思ひ出しの悪い者は再びよみ、吟味して欲しい。



偶感

岡田健一

「学生論」「学生教養論」の汎濫、更に「近頃の学生」乃至は「知性頹落」なる語の流行は、結局のところそれ自体余り大した意味を持ちはしなかつたけれど、我々にその必然性を考へさせる幸によつて、大きな刺戟を与へたと云へる。而も向題は結局矢内原教授によつて、その大体の傾向を曝露したのだと言へるかも知れない。と云つて僕はこゝで学生沈滞の究極の原因は、政治的なものにあるのであつて、我々の責任ではないなどといふ馬鹿らしい考へを云ふつもりはない。究極の原因がいつれてあらうと、向題は直接我々になければならぬのだし、学生全体がそんな高級な病氣にかゝつてゐるとも考へられぬからだ。尤も話が水泳部の事であれば喫茶店文化の耽溺者はこゝで話の範圍外に出るのだが、要するに我々学生は、無反省な突進的行動をさせて、さばめて消極的に唯、科

学、学向の輕蔑者から自己を守るより外には手が届かぬのであつて、敢て行儀よくとは云はないが、僕には結局この辺が我々の規準になる様な気がする。最近出た学生論に、学生は残された消極性を積極的に意識しないと云ふ事が書いてあつたが、妥当した言葉だと思つて讀んだ。兎に角我々はこゝで立ちどまつたり躓いたりせず、前進をつゞけるには、波い情熱が必要だ。

今我々の耳にたゞこが出来る程さかされを警告は、イーシー・ユース・インクと云ふことであつた。次から次へと夢遊病的に理想と称するものをあさる態度は、この意味で最も下等なものでなければならぬ。昔、河合栄次郎氏がマルキシズム時代の学生を賞讃されたのも、この意味であつた。我々がこゝへ中間的思想過程を飛躍していきなり結論を借用した場合でも、イーシーを徒に比すると比較にならなかつたのである。僕もこれを信じる。

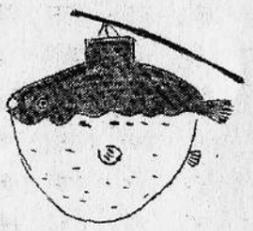
しかしこゝで云ひたいのは、かう云つた傾向が我々を正の事は絶対になか

つたかと云ふ事だ。結論から云ふなら、之の傾向は時に我々をして、一つのグ
ルンドに固着せしめはしなかつたかと云ふ事だ。極めて形式的に考へた場合、
今或る立場を輕蔑する事が我々の死を意味したとしても、だからと言って我々
が一生涯それ以外の立場に足をかけることも、更にそれ以外の眼鏡をかける事
も許されないやうな理由は存在しない。まして我々は学者でもないし、大学生
でさへもない。

科学者によつてカントが非科学的だと云はれ、西田哲学が「無の論理」の一
語でけづけられたからと云つて、我々々々等のものを直ちに捨て去るのは良く
ない事だ。並に唯物論が観念論者、フアシスト輩によつて何と罵倒されても、
我々の研究範囲を出なければならぬ理由はない。前者は科学者の言葉であり、
後者は観念論者の言葉でしかないからだ。(尤もこの場合全く形式的なことを
問題とするのだが)何れにせよ、両者は出発点から、約束を要してゐるので
ある。

我々は未だ若い。五里夢中の世界にいきなり飛び込んで、偶然をつたグルン
ドを如何にセメントで固めても、出ま上つた樓閣は足下から崩壊しなければな
らない。結局一生涯が依存する立場の決定は、なまやさしいものではない筈だ。
我々の若さは出来得る限り多くのものを経験する事を我々に許してゐる筈だ。
我々は何回も問ひかひ、何回もたゞきつけられて前進するのでなければならな
い。之はイージルの原因であり、現代に於ては更にイージルの双生児であり、
逆にイージルの徒の逃道でさへあるのだが、イージルではないのだ。
以上簡單不明瞭、無責任な寄稿だが、之で容赦されたい。

(一・二一) 「終」



古きエレメントのノートより

m . 水 生

僕は今、学校を出んとして居る。併し多分水泳部と全然縁が切れるわけでも
あるまい。

實際水泳部はよくなつた。内部のイザコザなんかなくなつたし、——實際此

の問題は我々が、尋常科四年の頃か、極まされつゝけて来た問題だが――
試合にも勝つ様になつた。

しかし水泳部も或る型にはまつたといふ事實は見逃せないだらう。昔程突飛トなくなつた。全精力を試合に傾倒とする今の競泳、或は水泳部にとつては、そんな余裕はないのかも知れない。實際昔我々は、良く負けた。殆んど戦ふ毎に負けた。此は府高運動部全体にわたつての事だつたんだが。負けた翌日登校して、負ける位なら試合なんかしなればいゝのに。新聞に出て見つともないではないか、等のそしりの言葉を、どんな気持で聞いた事か。プールのない我々としては、無理もなかつたかも知れない。負けを事は事實だ。

我々は唯この言葉を甘受した。、今に見ておろ、と云ふ気持をちつと胸の底に秘めて、これは他校に勝つと云ふよりは、むしろかゝる内部の言葉を一掃し
たいが為だつた。かゝる情なき友を見かへしをたいが為だつた。

我々は、戦績的には、めぐまれなかつたが、それでも楽しい思ひ出は沢山ある。多分今日の部員が、勝利の盃によふ思出よりは、ずつとく／＼なつかしい思出である事と信じる。

その思出の中より、もはや時効にかゝつたと思はれる。ゴシップを昔の日記よりすつぱ抜いて、書きなぐつて見やう。

昭和八年・昭和八年とは未だプールの出来てない時代で、しながつて曰大プールに通つてた時代である。
インター・ハイの爲の合宿を曰大プールで行つたが、勿論毎日、公用してたので、朝と夕方おそく、他にアスタープされながらの合宿であつた。この時は龍司堂の二階に宿つた。そこから歩いて通つたのである。

眞夏の晝の暑い太陽の下を、フンドシを括げてはかほかしながら、ホコリだらけの道をテーク／＼歩いて来ると、合宿所に、つく頃は大分人数がへつてる。二階で寐てると、おくれた奴がフトコロをふくらませて、一人二人帰つて来る。トマトだ。途中トマト畑にしのびこんだ。一年の大海や、オムツ氏などかこの名手だつた。さんざん食つた後で、又おやつに、盆に一パイトマトを盛つて出された時みんなの顔つたら。

オムツ氏 山下氏は、常にこの暑いのにな、おとんを頭からかぶつてねてたし長井氏はいつても下手な焚器を鳴らしてた。

そして僕と玉川は、常に、晝飯の教をこま化しては、無料で食つてたんだ。この頃プールのそばに、三人の少女の合宿ありき。頗あくまで黒く、その点に於て到底我々の及ぶところにあらず、今の田中すらならば白くみえんと云ふ代物なりき。彼女等自らを小鳥組と稱せしが、吾々も黒と稱せり。彼女等若立第一高女学校に在学中なりしが、何故に、かゝるキタなきプールに現はれ、何故に、オンリー三人で女だてらに合宿するやは知れず。

唯我軍に、長井、広部、河原のトリオの健在、たちまち友達となれり。一しよにポロなど遊べり。無聊をかこつ羽世帯にとつて、只々ユニークな存在なりき。

實際プールのあらはれる色々のメツチエンは、種々の意味での刺戟だつたらしい事は、その頃出来た部歌の一節と、合宿日記の一頁を見ればわかる。

六つと出たわいの、ヨサホイノホイ、

メツチエン馬力で泳ぐときはや　ホイ

千や二千は何のその、　ホイ

註、これは二百やつこの長井氏に特に当はまる歌なり。

七月十六日。七時十五分前起床、九時頃よりプールに行く。長井来る。一向駄目である。唯一のストリンター・メツチエンよりおそき華牛の如し。併し一同割にスラムプで、途端に猛練習、噫、夕方相変わらず猛練習、メツチエン案外来る。皆ブスでずべ。

八時練習終り、(部誌第一号より)

この年の八月に、尋常科初めての合宿練習が、青学に於て行はれたのだ。

昭和九年、この年のインター・ハイ合宿は、工業大プールで行はれた。我々尋常科四年は、毎日こゝに通つたものである。この時は非常に天候不順で、プールも曰大プールに較べてエラく憂鬱なプールだし、ミツちゃんの家外かすんだりして、あまりホガラカな気持ちになれなく、したがつてあまり面白いことも無かつた。

26
インター・ハイもこの年は、無得点に終り、小坂氏をして我々尋常科を試合直後青山の青柳に扱して、秋の七年制に若しも府立立立をざれば、永遠に立つ事

能はず、期して諸君の快力を待つのみ、と叫ばしめたのだ。かくして高・尋合
 同の三保合宿は、重大な意義の下に行はれたのだ。この時は小坂氏等は、一々
 尋常科生の家庭訪問して、水泳部存亡の秋をじゅんくと晴^く、以て、一人でも
 多く、否一人も欠ける事なく、合宿に参加せしめんと努力したのだ。フィヤ^キ
 覚えてるか。あの出発の前夜——その日は防空演習だったわけ。——君が親父
 を何とかしてくれと、僕のところへ来た時、広部氏のところへ一しよに相談に行
 った。電話で徳サンを呼び、広部氏と二人で共に談判しに行つて、やつと許して
 もらつた事を。

かくして行はれた三保合宿も、如何に風光明媚なところかと来て見れば、
 すんだ松原は未だ良いとして、その宿屋のきたなさと云つたらお話にならなく、
 堀立小屋同然で、女中は女中でみなマブダラのマリヤの前身を思はせる様な者
 ばかりで、おまけにプールは塩化ナトリウムを多分に含むと云ふ奴だ。臭水も
 ののないところだから恐ろしい。毎晩海の中までつき出たよしず張のところ
 でカンシヨを踊つてやつた。

家の女中はお岩かお化けし——と。

かゝる内に海で水瓜^水とりが催され、キヤン氏を始め吾が水泳部猛烈にはり切
 つて、無慮三十数個の水瓜^水を集め、あまつさへダンスさへあて、しまつた。宿
 の野郎柄になく喜んで、その晩飯は珍しく三品ばかりついたと思つたら、翌日
 から又煮魚一つ^代の一品料理になつてしまつた。これはく^くと談じこむと、昨
 晩のはダンス^代ですとぬかしやがつた。謎がダンスをやると云つた。ペラボ
 の。一品料理で合宿のアルバイトをおぎなへるかいつてんだ。つてんで早速宿
 をおん出るとなりの宿屋へ引越してしまつた。この晩一晩中、若冠尋常科二年
 の堀内をして雨戸をたゞ、ダンスをさせとどならしめたのであるから、全く
 つみなダンスさ。けれどこれも昭和武勇傳の中における傑作でもあらう。となり
 は飯もわりとよく、女中も若くて夜な^ノオサワヤオハラ節のおどりを教つた
 が、何しろ喧嘩した後の始末、プールを断じて、僕さなくなつたので、海で練
 習したが、クラゲ多く被害甚大なので、沼津の顔役井上氏に泣きついて沼中プ
 ールを借りる事として、早々三保を引あげ、沼津へと轉じた。

プタ狩りの記——沼津は毎日雨で、短日の中に、すべてを取戻さなければ
 ならず、練習も大分苦しかった。合宿最後の晩初めて雨はれ、町へ出る事も許

され、十時頃ウラリ／＼帰つて来ると、石渡がかけて来て、ヲタをつかまへたから手傳つて呉れと云ふ。一しよにかけつけると、成る程居る居る、夜目にも白い大きなヲタだ。キヤンが夢中になつてゐる。帯（実は兼フンドシ）をといて足にかけ様としなが、案外シヤンヲカがあつた。彼小路に這こんだら並襲して来た。その有様、山くぢらかと思はれるばかり。

とび上る股下三寸をすれ／＼を尻の如く、するりと抜けて行つた。その中にみんなの段々帰つて来るにつれて、いよ／＼ヲタ狩りは本式になり、鳥の中を縦横にかけ廻るうち、遂にキヤン氏のヲタを抱擁してキツスするに及び、やうやくおとなしくなる。こゝどと四本の足をフンドシですつかり縛つてしまつた。この時附近の豚小屋の主人が出て来て提灯で照らして曰く、これは家のじやないから持つてつてよいよ、と。田舎者はのんき者さ。この言に一同勇躍してフンドシを引き、且しリへをけれど動かさず。先の主人の言によれば、六十貫はあるとの事に、一同豚カツを何十人前か想像しつゝ、エ、ヤエ、ヤと引ぱつたが、やけに衰れな泣き声を立てるのみで、泰山の如く動かさず、遂に夜もあまりに更けたれば、トンカツを断念して帰る。後でハリキリ・ポイ、伊丹、横田、河

原等、夜明けの四時ころまで追まわしたと聞く。ネムイ／＼、グ／＼。

昭和十年

明けて昭和十年は僕達が、高専科になつた事だ。而してプールが出来た年だ。更に徳さんを主將に、黄色のシヤンを着て、あらゆる事に張切つた年だ。専らサボつても泳ぐことを奨励された年だ。我々一年がインター・ハイに初参加してもろくも敗け、三平の二階で相共に泣き、相共に痛飲したのもこの年だ。この年は、何時如何なる時でも穴かプールかどちらかには、都度必ず居た年だ。

思ひ出も深きシヤモヤキヤン、ミフチヤン、鷺山氏等を去つて、大海氏が三年になつたのもこの年だ。徳さんも一ちゃんもドも、三年になつた年だ。一ちゃんはます／＼彼の道に発展するし、大海氏の奇道もいよ／＼極限に達した頃だ。

30 水泳部の一冊となつて五月の記念祭にあはれ、全校をリードした。メンバーがメンバーだけにスキヤンダルも勿論数々あるが、けれどこれからはまた時効にもなつてないし、あまり長くなるなら、この辺でこの記録も止めておく。唯

一老人の昔話として、聞きながしていた。きいた。



塩谷 普

尋常科三年の折、丹沢氏のおす、のにより入部して以来既に五回種、この間常に自分の情操を培ひ、小坂氏の所謂「落付あるスポーツマン」を育て上げた。温床であつた水泳部を去るに当り、愛惜の念おくあはざるものがある。今ハ雲ヶ丘を去るに當つて述べたいことは山程あるが、時間が許さぬので極めて断片的な事で、訣別の辞に代へたい。

昨年三年になる石渡、中川、糸川の諸君、一致協力してあらゆる意味で今年我々が出発なかつたこともやつて呉れ。そして水泳部をもつともつと、合理的なものに仕上げてくれ、これ以外に云ふべき言葉は何もない。二年になる人達、噂にきくと何かつまりらぬ対立があるらしいが、これがデマ

である事を切望する。現に二年と云ふ *Balance of power* が居なくても表面化する事のないやうに、否そんな対立を根柢やし、文化的にも技術的にも、より一さうの進歩向上を切望する。

今年一年になる人々は、自分が何のたのみに高専科へす、み、何の爲に水泳部に居るのであることを、眞面目に考へられるやうに切望する。

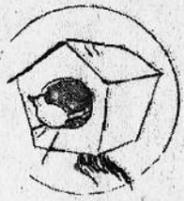
先日教授が云はれた。「この学校の生徒は、左へゆけば左へゆくで叱られる。右へ行けば右へ行くで叱られる。それで何でも叱られぬやうに、あらゆるして無思想のまま、出て行く」と云はれたが、一部のの人々にとっては暴言の上もないこの言葉を、長く考へてみてほしい。

又一言附言しておきたいのは、自分だけが進歩向上してゆくのではない。他の人も又同様に進歩してゆくのであるといふことを、常に頭に入れて行動せられんことを望んで止まない次第である。

尚今年一年間あらゆる苦闘に打ち勝ち、部の向上に努力せられた伊丹に、深甚の感謝の意を表したい。又常に我々を指導して下された諸先輩に對し、おく

ればせながら、感謝の意を表して筆をおく。

(一九三七・三〇)



哲学すること

——主として下級の諸君の爲に——

村 上 横 二

水泳部が「黒汐」といふ文化的な向上を目ざす雑誌をもつてゐることは、非常に喜ばしい事だ。文化的向上に對して、これ程の情熱にもえは運動部を、私は崇高を於ては外に見ない。實際肉体的労働者の集まりであつて、頭腦労働を輕蔑するやうな部は、この崇高に於ては排斥されねばならない。思索し読書し、人生の聖賢をなるとけ豊富にすることこそ、若い我々の任務である。世界観獲得の方法は、之を以てつきるのである。

亦だ一般的に思想的に幼稚な水泳部では、特に下級の諸君の中には、哲学的思索に於ても亦だ出発点にさまよつてゐる人が多いこと、思ふ。さういふ人達にとつて、多少とも参考になれば幸だと思つて、私はこの一文を書いたのである。

る。

實在を闡明する事が哲学の根本的命題だとすれば、哲学は事實そのものになり、それを吟味してその複雑な意義を見出す事を、まづ最初になすべきであらう。この意味に於て、聖賢論の重大な優位は決定せられる。併し事實とは何であるか。

存在せるものすべてはそれが存在である限り事實だと見ることが出来る。即ち常識の取扱ふものも科学の取扱ふものも宗教の取扱ふものも事實である。だが哲学の取扱ふ事實とは常識・科学・宗教の助力を受けながら、しかもその集積でもなく、それによつて限定され存在を認められるものではない。反対にその根據であり、それに存在と意義を与へるものである。何故ならこの様を哲学的事實は諸能力を一處に集める——つまり自我の極度の緊張によつて始めて把握せられるものであるから。

以上は哲学的事實と常識的宗教的事實との相違であるが、この相違がある為

哲学の方法は常識とか信仰とかと異つたものでなければならぬ。此が即ち直接経験及び直観である。但しこれだけでは哲学は決定されるのではない。唯特有な方法として直接と直観があるのである。

直観的方法に従ひ、純粹な事實に觸れて實在を把握することが根本的なことである。低級な常識や頑固な信仰によつて曲げられた事實でなく、純粹持続、こそ直接に把握すべきものである。この、純粹持続とは、意識は不斷の連続なのであるが、この連続的進行と云ふのである。

勿論この持続は普通の意味に於ける時間上の持続でないことは云ふまでもない。普通の意味の時間は、連続的進行をそのすぎ去つた後に反照して之を同時存在の横断面の上で即ち空間の上で静止のまゝ、でおいだ場合の並置的關係である。たとへば時計で時間を計ると云ふのは、針の進行を指針面上の空間的關係にうつして此を知るのである。従つて普通の意味に於ける時間は不斷に進行する時間そのものではなくて、その根柢には空間があり、空間的尺度による關係なくして考へることが出来ないものなのである。換言すれば、普通の意味の時

間は、現在を出發点として現在より背後に向つて無窮に延長したのが過去であり、前方に向つて無窮に進行したのが未来である。カント流の唯心論でよく時間も亦常識的見解と同様に眞の時間ではなくて空間的時間である。眞の時間は純粹持続で不斷に流動し創造し成長し進展する實在である。

根本的な直接事実から出發して初めて確實な根柢が得られる。積極的、批判的、進歩的態度を以て経験に直面し、根本的認識過程に突入して直接の實際を檢討すべきである。かくの如き要求を可能ならしめるものは即ち哲学的直観に外ならぬ。

哲学の最も注目し重要視すべき点は辯証よりもその論理過程であり、その論理過程よりもその出發的であるかぎり如上のことは卓越した価値を有するであらう。直観の力にみちびかれ、根本的の事實即ち實在の直接性を体得し、その意味を把握し、人生に革新と自由の原動力を与へることこそ最も必要なのである。

高校生活に就て

水野 謹 一 郎

高校生活はおよそ学に志す者にとつて最大の憧れである。白線・マント・蓬髪・朴歯で大道を闊歩する事を思ふ時、誰でも胸のおどろきを棄つることは出来なだらう。この傾向は現在なほ支配的であつて、彼等はしばしば「実質の伴はぬ文化貴族の誇で、」俺は天下の秀才だと多少ともあれ、潜在的に抱いて居る。之は無論一応は正しい。併しこのプライドは單に放哥高吟、歌咏的な高校生活の形式的方面に跋扈させてはならない。新思想吸収を標榜して其の如何等新鮮さのなかつた青踏社の愚をくり返してはならない。而も我々の先輩が弊不弊では物にも拘束されない事を誇つたのには少く共現在より確実な基礎に基ついてゐたのである。

即ち彼等はとうとうたる社会の裕物的汐流に抗して真理の探求に邁進する事こそ高校生活の使命であると考へた爲に外ならなかつた。併し現在の我々にとつて蓬髪、朴歯の大道闊歩は果して現在の我々の内的生活にとつて、必然的聯関があるだらうか？ 全て物事は其の成立の必然性が消滅してもそれに積極的弊害が伴つて来ない限り消滅しない。

併し洋服に朴歯の服装は如何に考へても時代錯誤のそしりを免れない。成程或る人々は之を見て微笑を感ずるだらう。併しそれは決して高校生が一頭他にぬぎん出て学向に邁進してゐる事への尊敬と、必ずしも必ずついたものではない。この事は必ずしも高校生活についてののみ云つたのでない。しかし学生生活一般を論ずるにしても、その指導的位置に坐るものは高校生活に外ならない。かく此処に特に取上げたまでである。

例をとつて見よう。ロツパ、エノケン等を筆頭とする愚衆誤業を取上げてみよ。そのスター・プレーヤーは多く学生であり、くすりの言動で木梢的滑稽感を刺戟する。之はある批評家をして低能鬼喝采時代の嘆を發せしめた。

我々はこの事実を他山の石として、大いに反省の實をあげねばならぬ。之は單に放哥高吟、朴歯の大道闊歩を以てしては行はれない。心あるものにとつてかゝる空虚なデモンストレーションは高校生活の挽哥と映じないとは保證の限

りではない。高校生がその何物にも拘束されない奔放さを誇るはいい。併しその奔放さが何等我々の内面的生活との聯繫がなければハリキリ、オランダの愚劣と益々露骨にするにすぎない。

かつて我々の先輩に与へられた尊敬も單にかゝる外見的な高校イズムに対するものではない。それは徳川幕府の鎖国のために、在界の進歩圏外から隔絶されてゐた我国の學問が急速に進歩を追求した一般的多混をリードするものとしてあつた。併し今はどうか？ 勿論比較的と言つたら我々高校生は一般レベルより勉強するかもしれない。しかし我々はかつての我々の先輩の持つた熾烈な熱情——勿論學問に対する——は果して持合せてゐるだらうか？ 我々は之に對して断平として答へることが出来ない。のみならず甚しきは白線、補函の形式的な高校イズムに耽溺し形骸化する學生となつてゐるものは果して皆無か？ 勿論我々における現行の學校の歴史が浅く、したがつて學校が社會に直接に真理に邁進する事が眞の意味で理解されず、一方に社會と全く隔絶してトライヴアイルな問題を穿さくするアカデミックスタイルを生み出すと共に、甚だしい曲學阿世の徒を生むことしばしばである。

ハイデルベルヒにビールを思ひ、ケムブリッジ、オックスフォードにボートレースのみしか聯想しない我々の學校の概念は一日も早く改められねばならぬ。この事は一見迂遠に見えても根本的であり完全な意味で直接的な次の方法によつてのみ達成される。即ち我々がもつと眞面目に學問を考へ、これの探求に努めることである。

高校生活と云ふことは、根本的に真理の探求であり、之を基調とすることが高校的生活であり、高校生らしい學問は誤つて解されてはならぬ。學問の真理に對する曖昧さは毫も存しない。高校生らしい學問とは率直に眞剣に學問に精進すること、それ以外の何物でもない。

安価なヒロイズム、虚栄にわづらはされることなく、形式的な高校イズムは清算されねばならぬ。現代の新しい高校イズムを建設する爲に、我々は先づ身一のマントを脱ぎ捨てねばならない。

高等学校へ入る時に大抵の人は、つまり尋常科の環境的制約より、高専科的制約に入りこむ人々は、転換の際に豊かな希望を抱くであらうが、之は主に漠然とした自由の欲求に条件づけられておるのであり、更に、その自由が或る程度まで実現され得るところに、豊かな希望の原因があると思ふ。僕はこゝに高専科に於ては如何なる自由の限界があるか等と云ふ事は論ぜず、生活的な部面で、僕の独創を展用しようとするのであるが、この独創は本より学向的に帰納したわけでもなく、單に経験の集積であり、文学的範疇に属するわけであるから、そのつもりでよんで頂かねば困るのである。我々は先づ自由の概念について考察してみよう。「ヘーゲルは自由と必然との関係を正当に叙述した最初の人である。彼にとつては、自由とは必然への洞察である。「必然が盲目なのは、唯々それが理解されない限りに於てにすぎぬ」。自由は自然法則からの空想的独立の中に横はるのではなくて、この法則の認識の中に、そしてこの法則

と共に与へられてあるところの、この法則を計画的に一定の目的の爲めに作用させる可能性の中に横はつてある。この事は外的自然の法則に隣接してと同様に、人間そのもの、肉体的及び精神的存在を規制する法則に隣接しても妥当する。此二種の方法は、吾々はをかん／＼表象に於て区別し得るのみで、現在に於ては区別し得ないものである。だから意志の自由とは事実の知識を以て決定すると云ふ能力以外の何物でもない。かくてある一定の論点に關してのある人の判断が自由であればある程益々大きな必然性を以てこの判断の内容が規定されてあるであらう。然るに無知にもとづく不安は、多数の相異なる、且つ矛盾し合ふ決定の諸可能性の中から、外見上恣意的に迂廻するのであるか、それは正にその事によつて、その不自由を、それがまさに自ら支配すべき対象によつて支配されてある事を表明する。かくて自由とは自然的諸必然性を基礎とせる、吾々自身に対する、及び外的自然に対する支配の事である。だからそれは必然的に厂的発展の所産である。

上の長い引用によつて、我々は、我々が外的な自然法則を自分自身のものとし、且つこれを自らの手段として目的の爲に活用させる事が自由である事を思

が自由である事を見た。そして完全なる一切からの自由と云ふ理想に達するに
 は、之に藉すに永遠の時日を以てせねばならぬことを見た。即ち我々の時代に
 は未だ凡ゆるものが自由ではないのである。

然るに社会では自由競争が行はれる。この大なる矛盾の下にあつては、それ
 がその人間は「一切に對する一切の斗争」を至聖しなけれはならない。そして人
 間の目的が、意志の自由、人格の實現を目標とすれば、之を實現するには、
 先に見た様に、他在を自己の目的の手段とし、之を支配してしまはねばならな
 い。即ち純粹な支配者のみが自由であり得、人格の實現をなし得るのである。
 こゝで我々の生活方法について考へてみようと思ふ。普通に生活能力のつよい
 人間、権力意志のつよい人間、積極性にとんだ人間等といふ一群がある。彼等
 の目的が究極に、理性に裏打された自由である事はたしかだらうが、如何なる
 事に自由を見出すかは、如何に學問の結果より導き出された目的であつても、
 その時代の社会關係に規定されるより外ないのである。そして現在では學問と
 現実とが相對立してゐる事は衆知の事實であり、結局は現実が目的の限界を違
 つてしまつてゐることも衆知の事實である。

だから我々はこの前提の下に初めねばならないのだ。さて前述の生活力の旺
 盛な人々はこの場合どちらへ行くとせうか？ 勿論現実の前で青息吐息して屈
 服してしまはないのである。彼等は本能的に天才的支配が最上の自由である事
 を知つてゐるから、自分のあらゆる才能、手腕、技巧の限りをつくして、人を
 おしのけて上へ出やうとするのである。

勿論、自由を求める態度としては之が一番本能的であり、又その限り本質的
 なものである。ペシニストやロマニチストなどは彼等から見れば人間の層であ
 るにちがひない。ところが僕は所謂小市民的生活者の間にも、自由はあると思
 ふのである。

こゝで僕は価値の批判などをやらうと云ふのではない。又更に改めて、僕が
 今こりあげてゐる「自由」からの觀察がきはめて一面的であり、皮相的である事を
 御記憶願ひたいのである。それだから僕が先に云つた様は、僕の考へはドラマ
 であり、文學の範疇に入れられねばならぬ訳である。しかしそれだからと云つ
 て、現在日本のインテリの大部分が小市民的生活に甘んじて居り、又多くの学
 生もその気分を抜け出せぬと云ふ事は、否定するべくもないのである。この

気分にか何か説明つけ、何か理由を發見したいと思ふのである。

一般に云つてインテリは天才的には安定した社会相であり、本質的には現在の天才機構の動搖を望まぬ者の集りである。しかし彼等は學問を受けて居り、かの理想と現実の対立を熟知してゐる。マキヤベリスト達は潔く現実に加担するのであるが、良心的等といふ言葉を知つた者は、どつちにも走れなくなつたのであつた。

勿論公式的にはもつと明瞭な規定があらう。しかしそれは今大して問題ではない。

彼等の性格はペシニスト、ニヒリスト、オプチニスト、オポチニスト、エトセトラ、実に雑然と組み合はつて居る。而もインテリは、この様に自己の性格を喪失して居る上に、自省の遲鈍と云ふ現象が多いのである。反省とは恩恵と同じ作用であるが、受動的な点が特徴的である。現実に対する能動的な役割を失つた彼等には、だから現実に圧倒され支配される、單なる受動的な立場しかないのである。所が一般に小市民的とよばれる運命主義的な生活態度は傍觀者の生活態度である。

だから凡ゆる社会現象を冷靜に見る余裕を持つわけであり、他人の向度として仕うけられ得る限り彼等は自由であるが、華か功利つまつた自分の華になつて来れば、彼等の立場は実に悲惨なのである。しかしながら此の場合にも、消極的な反抗か屈從のみが彼等の解決方法である。自己の牙城に閉じこもり、消極的な自由に、消極的な蘊憤をほらす、インテリの生活は時代の宿命とは云へ、寂しい限りである。

オリムピックとヒロイズム

堀内 淑彦

近代オリムピックは、古代ギリシヤに於けるオリンパス神の祭りに於ける競技を二十世紀に復活したものである。古代オリムピックの発生はアテネ國家の発生した以前、即ち英雄時代に於て見られる。ギリシヤ英雄時代は末周時代より野蠻時代への過渡的である。モルガンは人類の歴史を野蠻、未開、文明に三

即ち野蕃時代は出来上つた自然物をそのまま、利用した時代、未開時代は人間の行為によつて自然物の生産の増加を習得する時代文明時代は自然の産物に対するより造んを加へ、大工業、芸術の時代である。ギリシヤ英雄時代は未開時代の一段、即ち最終に位する。即ち鉄鉋が發見され、家畜に曳かせる鉄の鉋が製造され、大規模な農業により食物が増加する。

ヒロイズムは人類の未開、野蕃時代に於て必然的に抬頭する。頭腦の發達の幼稚な小児が軍人になりたかつたりするのも、その心理である。

野蕃な自然的制約の激しい時代は自然を畏怖し、不可解なものとして畏れ、こゝに於てギリシヤ多神教が起つた。人間に於ても酋長を神祕的なものとしてあかめる。そして生産手段の發達により、人間は次第に自然に働きかけ、神祕を排除く。

かゝるところに發生したオリムピックとして、民族の發達の全盛期でもありヒロイツクな要素は否めない。

か様に發生したオリムピックも生産力の發達に従ひ、國家の發生、私有財産の確保により矛盾を包括した、氏族組織が滅びし始め、氏族の共同財産は私有

財産となり、監視せられた私有財産が神聖化せられ、氏族間の對抗競技であつたオリムピックも、意味をなさなくなつた。各都市國家を代表した選手はヒロイツクな意味を有せず、各都市國家の貴族の優越感を満足せしめる道具と化した。選手は金で買はれ、競馬馬場的な存在となつた。そして古代オリムピックは紀元三九四年に中止された。

高度に發達したギリシヤ、オリムピックは又一種の芸術である。すぐれた彫刻をほどこし、広大なる競技場に美しい男性的肢体の躍動を見る。此に調和するに舞踊と詠唱があつた。アテネ人は芸術の國民である。併しギリシヤに於けるこの芸術を始の哲学、詩等は奴隷制度により發達したものである。未開人は一日の労働で己れの一日の食物だけしか得られない。

併し生産手段の發達、分業により次第に短い時間で食物を獲得し、文化的もの、發達を見る。ギリシヤ人は殊に他種族との斗争によつて得た奴隷を勞役に使用して、自分達は文化的の向上を計つたのである。アテネ人はこの芸術の發達と共に、自己の肉體を競技によつて一個の芸術品にまで仕上げた。そしてオリムピックは都市國家間の融和と國民的のオリムパス神の祭礼のため發達した

ものである。

近代オリムピックは二十世紀に開かれたが、生産関係の発達した現代に、古代ギリシャ、ヒロイズムをそのまゝ適用された、之等資本主義内部より生ずる反動的復古主義によつたのである。これは厂史を發展的ではなく、君子國家の行動を見て、現実の生産関係を困却したものである。單なる偉大な國家的行動、宗教的闘争を見て、更にその表面に於て活躍する英雄偉人の活動により、厂史は作られるのではない。

英雄の存在はその時代の生産関係及びそれに規定される上部構造の相互作用及びその生産力への反作用により、構成された全体、即ち社会の中に規定される必然的なものである。ブルジョア、イデオログ達は殊更に英雄を讚美する。それらの英雄は國家の利益に貢献したものを意味し、國家の支配階級たるブルジョアの英雄を讚美するのは当然である。

この代表としてヘーゲルをとつて見ると、その個人的目的がその中に同時に世界精神の意志たる絶対的なるものを包含する者が英雄である。ヘーゲルにとっては、國家は理念が人間の自由と云ふ形態の中に表れたところのものである。

る。個人の主観的なもの、中に自然的なもの、即ち要求、衝動、主張、見解等と本質的なもの、即ち倫理道徳がある。

自然的なものは自然に制約されて、眞に自由ではない。本質的なものは理性であるから、それを認識する事は自由である。この本質的なものは又普遍的なものである。併し主観的意志は現実的で理性は内的である。理性を現実化させる為には主観的個別的意志してのみ可能である。即ちこの理性的な意志と主観的意志との統一である。國家は個別的普遍的の統一の全体である。

この國家の普遍的な義務、法律と多くの可能的存在との間に衝突が起り、可能的存在は固定的組織に反抗し、根柢と現実性を破壊し、他の内容を獲得する。在野史的人物即ち英雄はこの新しき普遍者を目的の中に包含するものである。しかし要求、衝動、見解等はヘーゲルに於ても義務、法律等普遍に制限を受け、その範囲のみで活動が可能である。

50
今ヘーゲルのこの概念の自己運動を物質の運動におきかへて見る。物質には現象と本質とがあつて、ヘーゲルの主観の中の自然的なものと、本質的なものとに當るものである。そして勿論この本質と現象とは分離しては存在しないの

である。人間は多くの、無数の現象の相互作用を、連綿をよく観察し、本質を知る。

又ヘーゲルの自由は、本質的なもの即ち理性的なもの、認識が自由であるが、しかしこの場合、本質的なものを認識して、更に自然、社会に働きかけて、初めて人間は自由となるのである。現代医学の発達により、傳染病といふ自然的制約の治療が出来て人間はより自由となつたのである。

さてこの本質には、内容と形式とがある。内容は形式を規定し、形式は内容に働きかける。社会に於ける内容は生産力で、形式は生産関係である。固定した形式と発展する内容との間に矛盾が生じ、内容と形式との統一が生じ、内容により新しい形式が生じ、新しい形式は内容中の古い要素を改新する。この突ヘーゲルは明敏にも前述の如く、普遍的義務、法律と多くの可能的な存在との間に衝突が起り、可能的な存在は固定的組織に反抗し、根柢と現実性を破壊し、他の内容を獲得すると云つてゐるのである。

ヘーゲルの誤は意識と存在との突である。

自然的要素は、生産手段を生んだ。即ち最初はこの突等て生活したが、石を

もつて獸を殺す事を覚える。生産手段の總持たる生産力（内容）は逆にヘーゲルの云ふ普遍的なるもの、即ち義務・法律・権利を制限し規定する。しかし此等の法律、義務等を規定するものは、生産関係（形式）である。

そしてこの生産関係と、可能的なるもの即ち生産力との衝突即ち生産関係は、或る時代、或る瞬間の生産力に基礎づけられ、固定的なもので、生産力は発展的なものである故、両者間に矛盾が生じる。それが止揚せられ、そして之等上層建築が新たなるものに変へられる。此処に於てヘーゲルの世界史的人物の概念は変更せられ（勿論生産力に規定せられる）生産関係及びそれに基礎づけられた上部構造の相互作用及びその生産力への反作用の全体、即ち社会の一員として、社会に制約されて必然的なる人間となる。

近代オリムピックの必然的推移として団体競技が増加する。近代スポーツは少数の特定の人間のあそび事ではなく、大衆的団体的なものに推移する。

即現實的立場

——小市民的態度の放擲——

中村 稔 治

一般に我々の同圍を圍繞してゐる現實は、着るしく小市民的である。こゝからは、インテリゲンチヤといふ階級が現在持つてゐるところの社会的地位が只技術的な學問による奉仕のみを要求されてゐるといふ状態より、巧に操作されて、中間的な地位に足のついて特殊な空間にとまつてゐるものである。

安価なヒューマニストやロマンチストの沼澤はすでに學生・インテリゲンチヤの宙に浮いた地位より生ずる病的な現象に外ならない。

實際私としても、詩と絵と音楽と恋と娘と小鳥と花の美しい夢の世界に、自分をよく方を好む型の人間で、多分あるに違ひない。が併しなから私は、詩が、絵が、娘が、恋が……それ自体が自由そのものとは考へない。それ自体が目的だとは勿論思つて居ない。

小市民的な自由に対する憧憬に対して与へられるものは何か、といふ事によ

く台点が行かないならば、昨年度の最高峰たる日本映画——限りなき前進——を思ひおこせばよい。

限りなき前進とは、畢竟遂に到達出来ぬものへの水遣の足掻に外ならないのだ。それ故にそれは、我々學生がその幼なさ、力なさの背後に逃避してゐるといふ事に対する非難、即ち現實よりのあらゆる手段による逃避の攻撃、學問による現實の直接な昨年頃より唱導された一因をなしたのである。

實際「町人根性」といふ奴は、量が頃に変る時生ずる、それは内部の停滞なんだ。彼の三角筋はどん／＼成長するが、彼の知識水準は高まりはしないんだ。——と云ふ技巧の拙い小説の中の一文を、小宮と花と娘と恋とかの種つある漠然とした雰囲気から、自由、といふカテゴリーをかもし出して、その自由なる語に含まれると思ふ漠とした表象を空想して宙にういた漫歩をつゞける人々に呈出したいとさへ思はれる。

すべてこの限りなき漫歩は、小市民的な生活態度に生産されたものであるといふ事は前述の如くである。漠然と自由といふ餌につられて動きまはる追求からは、失望以外の何物をも得られない。

充足に於ても終局に於ても常に我々の行動を規程するものは、我々をとりまく現実の外ならぬ。如何に現実を輕蔑したところで、人間は決してこの現実の法則からまぬがれない。現実を無視する様な態度は、却つてそのために法則の作用を予知し、それを自分等の目的に到達せぬ、どうぐりの行はねばならぬのである。

吾々が自然の法則並びに社会的、丁史的運動の法則を知り、そして我々をこれに順応せしめる限り、まさにそれだけ自由なのである。俗物的世界観によると客観的實在の追求は、人類を一種の機械と化するもの、如くに思はれて居るが、実は自由と意識への公道と歩武堂々と歩むものなのである。

勿論現実と云つても、金錢欲とか牛飲馬食でもなく、亦單に我々の階級性如何と云ふ問題につきるものでもない。尤ともこんなことを云ふのは、蛇足と思はれる程明白な事柄ではあるが、即ち現実的立場と云ふのを、オポチニズムの提訴と誤解されるのをおそれながら一言したのである。吾々が知性の向上を目する時へそれは現今ではわうかに残りつゝ、ある特権だ、たゞ單なる思ひの体

系をそのまゝつみ重ねるやうな、無意義な態度を排斥するのである。

すべての思ひは決して一人の天才の成しとげたものではない。それはあく迄社会の下部構造との相互の連関に於て把握すべきであつて、吾々は粘土の定の上に膨大な思ひの体系を乗せてはならない。

しかし一際の際の表象は人間を通じて我々に感得される。故に「即人間的立場」を高揚したい、即現実的立場等以ての外だ、といふ人が居るかも知れない、しかしそれは當つてゐない。「即人間的立場」と「即現実的立場」とはその当人の當へられるやうな差異が存在してゐないからだ。

何となれば人間的本質は社会關係の総体であるからだ。「即現実的立場」こそ我々のインテリジェンスを深めてゆく唯一の眞実の方法であるといふことを、私は茲に改めて強調する。(二月十日)

完



即興詩

石渡良一

私は

一

私はいろ／＼なことを夢にみた。

しかしそれは余程まへであつた。

此のころは、

一向にみたこともない。

「多分ゆめみることがなくなつてしまつたのだらう。」

と思つても見るのである。

二

物ごとを、そして、又争物を、又人面を、

又社会を愛するといふことは

甘いことではない。

と、ある人は私に云つてくれる。

さうだ、私には、

私には貴重な言葉だ。

よく覚えておかう。

三

私の初めに愛したのは、

或る南国の、

ちやうど今頃は山でみかんが

黄色く染つてゐる。

村であつた。

今ではサテトリウムが出来て、

人々にも知られてゐるさうだが。

私は、今では、
行く道も忘れてしまった。

四

けれどもこの村で、

私はニヶ日も自分をせめた。

何のためにか、

恐らくは私が余りに

多くのものを愛しすぎたことを、――――

（しかし、それから次には、一年中雪にこざされてゐる

北の町を好きではなつたけれども。）

――――悔んでゐたのであつた。

五

青く透明な汐のうねりと

白くもと、廣い静かな海原と、

不思議にもそれだけしか、

想ひ出されないのである。

昔い、ほんたうに若やいだところの

点景である。

生のよろこびの享受でさへあるのだ。

六

又、

北国の嵐の夜であつた。

雪崩のため汽車は不通であつた。

帰らうとして雪の港野に

おき去りにされたのである。

強い北風の音を屋根に感じながら。

私はたゞふるへて居た。

それでも、
夜あけになると嵐は幾分おさまつた。
真白な外界を氷りついた窓に、
荒涼とした灰色の海が
目に入つて来るのであつた。
貨物船だらうか！
離行をつゞけて港に入つて来た。

七

たが、——私の愛したのは、
常夏の南の海辺や、
吹雪の北の町であつた。

八

又

都会の曾であつた。
そこが何といふ街であるか、
私は知らない。
また、なんと云ふ雑沓であつたか。
これは私の気に入らなかつた。
私は、
その人ごみの内で
自分が親指程に小さくなつて見えた。
或る人が私に近づいた。
私は小指程になつた。
又ある女が私に話しかけた。
「あかんほの来る場所ぢやないわよ」
「どこが？」
「夢の国のことよ」
「どこが？」

「少くとも此処ぢやないわ。」
私は一つの点に立つた。
もう誰からも
みとめられることはないのである。

九

人に押されておると、
黒いぶみが私の顔にこびこんで来た。
ひどく、苦しく、むせだ。
息がつまるおもひで
私はこの街を立去つた。

十

愛すればといふことが甘いことではなければ
愛されることは、

甘いことだらうか、

遺り。

遺り。

私は愛される負担に
堪へきれはしないだらう。

この負担に堪へる自信のある人は、
恐らく幸福であらうか。

x

x

x

では愛しなくてはならないことは、
どうなのであらうか、
私はたゞ、
だまつて首を削るのである。

自我意識

森田 野

今日の青年・学生は、実に自我意識がつよいんだと思ふ。「自己」的な「勉強」をしようと思ふ。青年・学生が言ひすぎなら、少くとも市立高校の生徒は、いや、もつと区切つて、今の僕等の学年についてなら、明瞭に断言し得る。

その中の或る人達が、どんな馬鹿おどりのおどり方をしようか、やはりこの傾向からのかれることは出来まいんだと言ひ得る。その自我意識とは如何なるものか、明瞭に且つ正しく説明するとなると、僕は少々躊躇する。その自我意識とは、別に、利己主義と同一義ではない。なんとすれば利己主義とは、一つの非道徳的行為である。非道徳を公然と行ふのは、自我意識に一致しないからである。要するに一種特別の自我意識である。

彼等はおとなしく、元気がない。狭義に於ける元気の足りなさである、或る一部の人々の使用する、引つこみ思案とでも云へばよい。そして又一方要領が良いのである。が馬鹿おどりをする御連中は、罵詈雑言を好むの余り、この要領を犠牲にしてゐる。この連中も又一種特別なる存在である。彼等の中にもいろいろ種別がある。

ニヒラスチツクなすね者のやうなものもある。しかし、彼等と雖も又自我意識的傾向はまぬかれぬ。序に云つておくが、勿論これは我々学年に限つたわけではない。しかして彼等は要領を軽蔑しやうとさへする。即ち、表面的にさへも、その自我を、自分がその傾向の、自我なるものを捉へやうとしなないのだから懸である。余り頭の良い連中ではない。

66

自我意識の典型的所有者に非ざる人、それにもつと従順なる人は要領がよい。しかし要領とは、人に自分を良く見せることではない。頭のわるい連中は、それを知らないのだから気の毒である。即ち、彼等、要領の良い人々は、自分の各々の個性にしたがつて要領を決めてゐる。生活の要領である。セル(小室)である。シエルと云つてもよい。自分の生活を行ふべき範囲である。人に自分をよく見せる要領よりは数段勝つてゐる。始めつから、要領を有しない連中より

見れば、月とすつぽんである。

しかしながらその要領にして、未だ表面的なるを出でない。そして、それは、より深く生活を徹底せしめるには、妨害ではあるかも知れない。

彼等は自我意識の影響をうけてゐるのである。そして、それによつて要領を決定してゐる。即ち、自己の生活を決定してゐるのである。それは良いと同時には悪いのである。(少々詭弁かも知れないが——)その点で要領を有しない連中の方が良いのである。しかし彼等は、なか／＼馬鹿おどりを止めないから、どうもやつぱり何も建設しない。

建設の話になつたが、何をたてるんじか僕は知らない。何か一つの理論であらう。しかし、自我意識強き人々は、始めつから、そんなものはどうでもよい。面倒臭いと云ふ風でもある。しかし彼等がすべての理論を試験して、それから役に立たぬものとあきらめた筈はない。彼等の先輩たる学生その他のインテリの人達ののこした悪尻であらう。

それならその先輩は何故逃避したのか。いろ／＼原因もあらうが、要するに沢山の理論が皆、力でないからである。有力な理論はなかつた。たしかに。運

去に於てはあつたらうが、現在においてはない。いや勿論存在はする。——
として。しかし無力である。その本質のためか、それとも自我意識のためか、それとも歴史的な原因によつてか。

自我意識のためと云ふのは、意味が二通りある。それを、つまりない下らないものに解釈しての時と、重大な大したものには解した時とである。かく、有力なる理論はない。しかしないではすまない。多分すまないだらう。自我意識の上には於てある。すまないと云つたところで、なければすまざるを得ない。いや、すましたと同じことになる。

さうなると、既成的な理論に求むることは、止めねばならぬ。自分で探らねばならぬ。自分の生活である。自己の上には於ける理論を有して然るべきである。少くとも自分の生活を考へ悩んでみるべきである。

(終り・一・二一)



断片

成合 璋彦

哀れな奴の狂へる吾が友人の日記から、とりとめもなく書かれた断片を拾ひ集めてみる。

x

x

x

—— 恐るべき世界だ。見る奴固く奴、悉皆之狂人だ。

—— 人間の世帯から完全にシヤット、アウトされた者が、哲人乃至聖徒と呼ばれ、メめ出されて着未練がましく人間世界にしがみついている者が、法律、刑務所の御厄介になる。

—— 先が見こせぬ奴を愚人といふなら、生れてすぐ棺桶に入る者が賢人といふ訳か。

—— 背の高いのを鼻にかけるとすれば、世の中でキリンかエツフェル塔が一番偉い。尤もかう云ふと、溜飲を下げることもあるが。

—— 肥つた女をさして、

「あの女はうまく骨をかくしてある。」

そこで肥つた男に出会つたなら

「君は飯を無駄に食はんじ」

特に肥大した女には

「ころんでも骨は大丈夫だ。」

碌々の子沢山には

「ハ、ア、あなたは社会的国家的見地から、米国の消費を援け、農民の飢喝をお救ひになるお心算ですな。」

—— 春の晝さがりのひばりが、青空に何の屈托もなく嘯つてゐる。空は広いから、雲雀がつつかへる心配はない。

—— 栗鼠は一体何をきよろ／＼鬼まはしてゐるのだ。

—— パラマウント・ニュースを見て

「あや、米国人も野球をやつてゐる——」

——尊が低いと云つて、さう悲観するには当たらない。場合によつては、顔を斜にする労力の省けることがある。

終

來年への希望

——尋常科部員へ——

村上 保男

今年のシーズンももう終り、我々四年部員はそれ〴〵高卒へ進まんが爲に、亦あらゆる方面に、——學術的・常識的・人格的、——於て高校生としての資格を得んが爲に、今努力してゐるのだ。

さて私は来年の尋常科部員に、私個人の希望をのべてみたい。しかし私は決して先輩がつたり偉かつたりする事は全然ない事を知つて頂きたい。

今年の我々尋常科水泳部の試験の批評は第三者の公平な判断にまかすが、我

々は七年制では、敢し、我々はあのカツプを手に入れることは出来なかつたりけれども、私々は或る無形を尊いものを得たと思ふ。そしてこの無形を暗示的にあるものを有形なものへと、そのものを實現するところに、君等の使命があると思ふ。

並項私は年手制度廢止論をきく。何時たかの府高時報の上にも、この問題について論ぜられて居た。私は運動部員のうちに部員の意義と特権を眞に理解してゐないものがあるのではないかと思ふ。教師に反抗し、校則に反抗する事が運動部員の特権であるかの如く思つてゐる者がないだらうか。

我々は七年制なるが故に、高卒科と交はる機会が多い。そして必然的に、高校生活なるものをきく。この事はその利用如何によつては非常なる長所であり、又運動部員の特権なのだ。しかし多くの場合、悪は善より先に耳に入る。實際悪は善より魅惑的だ。しかし君等は尋常科生であるのだ。高校生活のすべてが我々に善とは限らないのだ。運動部員は他の木偶に比して余りにも進歩的なたのに、と角うはさにのぼるらしい。彼等はごくつまらない授業のことを、非難してゐるのだ。しかし公平なる第三者からみれば、云はれるだけの理由が

あるのかも知れない。とまれ延手制度について、鬼かく云はれておるときだから、来年の部員は水泳部に限り、かゝることが決まれない様にしたまへ。(併し私は決してこそ真面目になれとは云はない。よ、う、り、や、う、よ、く、や、る、事、が、必、要、だ、と云つておるにすぎない。

然し善悪とは評価にすぎないと云ふ。即ち善悪は時代によつて変化し、そこに融通性があるもので、絶対的なものではないと云ふ。然し小さい範圍に於て考へるならば、その時の社会に於て悪とされた事は悪であり、善とされたものは善であると思ふ。小さな例をとつてみるならば、飲酒喫煙は法律上では未成年者のそれを禁じてゐるが、現代の社会と人は、高校生のそれを、云はゞ一般的に認めてゐる故に悪とは云はれないが、中学生の飲酒喫煙は法律的にも社会的にも悪と断定されてゐる。(亦實際中等学生には体育上より云つても悪いのだが)ストライキを例にとつてみても、そのことはわかるだらう。しかしまあ所謂悪とされてゐる事は、しない方がよいと思ふ。

我々の行為が無意識の中にも善である様になる爲には「おちつきあるスポーツマン」になる必要がある。如何にすれば落つきあるスポーツマンになれるだらうか。之は僕にもよく分らなけれども、教養と常識とをつける事が、その一方法であると思ふのだ。その爲には読書も良い。趣味の向上も良いだらう。特に読書は必要だ。読書の必要なことを知るのには、尋常科を正に終らんとする時が多い。この時にはもう或る程度の差が、読書した人間としない人間の間に出来てゐる。

自分の思想の貧困が悲しくなつて来る時もある。スマートで一時間早かつた者は、最後でいく日もの差を他の者につける事が出来るのだ。早い程よいのだ。君等が読書する事を希望する。さもなければ君等も僕等と同じやうな後悔をのこすだらう。

部員はもつと自覚とプライドを持ち給へ。自己の行動に対しては、責任を持ち給へ。自分の行為の爲に、部全体に迷惑をかけるやうなことをしては駄目だ。

亦君等は七年制の特色を生かす様に努力したまへ。そして尋常科時代は何ものかを抑まへる事が必要だ。天才教育の是非は知らないけれども、何か一つの事をマスタートする事は、価値のある事だと思ふ。まあ精々、イージー、ユース、イグな生活はしない方がいいだらう。努力すればする程、苦しめば苦しむ程、

後のたのしみは大きいのだ。

一方イージィ、ゴイーイングな生活は、後悔と空虚と失望とを残すだけであると云ふことを覚えておき給へ。

四年生に、――君達は最上級生たる自覚とプライドをもつていなければならない。四年生同志まとまらなければならない。内部の不統一は部全体の進歩を非常に害するだろう。勢力争ひは嚴禁、みな野村を援けて水氷部のため、一致協力しなければならない。多少の不平不満はあつても、自分の胸にしまつておく方がよい。下級生に対しては、兄の威厳と慈愛を以て望むがよい。蹴球、籠球の二運動部の動静をよく見、水氷部の勢力を之等の部に劣る華をしないやうに、努力する争を望む。

次に対高等科向願がある。二三年より尋常科水氷部の独立と云ふ華か云はれて来た。今年の始めに我々は、高等科と精神的に対立したが、一つのプールで暮さなければならぬのを、対立するては不快なのである。先輩、高、尋一休となつてこそ、初めてよき水氷部が生れるのだ。君等には水氷部を我々部員の最後のオアシスにする爲に、一役かつて出る必要と責任とがあるのだ。

とにかく君等四年は責任が重大である。しかしそれだけに幸福かもしれない。



記 録

高等科 ウオター・ポロ

今年度の水泳部の対校内対外評は、主としてインター・カレッジのポロの戦績による。そのポロたるや実に三年前、サークルの創設以来の愚案たりしものを、今年度先輩の伊丹主將の天断をまつて初めて開始されたのであつた。春の浅き三月の、本郷の泰明館に於ける合宿に、片岡コー子を招聘してオリムピック帰りの新知識を以て根本よりたゞきこまね、従来ポロと云へば、野蠻な敵をたゞ水の中へ犯めこんで、更にこれをぬみぬめるものであると云ふ、あやまねる観念を一擲し、球の持ち方の第一歩からスタートしたのであつた。三月の合宿はたしかに短期間であつたには相違ないが、この間只得たところは甚だ大であつたと云はねばならない。この時は岡コー子のすゝめによつて、肉東学生水球リーグに加盟することに方針を定められたのは、あとから考へると我が新高ポロの礎であつた。

五月上旬にプールの水の入換がすんで、これからいよいよ本格的なポロの練習を行つたのであつたが、最初のことゝてなかく意の如く運ばず、球が投げられなくて苦心を極めたやうな状態であつた。その上初めの中は、水温が低くて長時間の連続練習にたへられなかつたのも、亦練習を妨げて居つた。その中に五月の中旬から六月にかけての頃は、次第に球が投げられないうゝなことはない様になつたが、未だ技術低劣で、僅かに伊丹主將と本岡氏、橋谷氏の理三甲の連中が勝れてゐた。岡田氏は冬の間に盲腸をやつて、シューマン半ば近くなつて練習開始と云ふ状態で、到底死に片岡コー子と約したインター・カレッジなどは思ひもつかなく、たゞもう慈恵と国学院くらゐに勝つたら、もうけものだらゐの頼りない望みを抱いてゐたのである。

さていよいよポロ・リーグの蓋あけの真先に、商大と五月二十七日に當つたのであつた。何分初のポロ試合、——従来のは正規の練習とは云へない故、インター、ハイなどの記録もあるが、教へられない。——のことゝて、辻手のあかる争奪しく、水温十七度に禍ひされてか、六―で敗北をかうまつた。しかるに当時皆の喜び方は非常なもので、ポロの尸史初まつて以来、常に二桁で敗

けて来たのに、昨年第一部にあつた商大に僅かに六點、加へて伊丹主將の一點があるを雀躍して、この分ならば二三回勝てるかも知れないと一道の光明を得たのであつた。

次に法大と當つたところ、劈頭得点を先取して、以下伊丹主將と敵方主將とのまるざり交替の如きロングシュートの応酬裡にゲームは終了して、最後に敵がシュートせんとするところで笛が鳴つた。幸運も手傳つて七一六といふゆゑの如き勝利を得。皆茫然自失の態であつた。その結果、次の国大、中大、慈大に勝つと云ふ確信を抱き、又予想の如く快勝したのであつたが、未だフォワードの動き足りず、パスも拙く、欠点はかり見るもの、目についてゐた。

しかし之等の戦ひを窺すると共に、漸次試合度胸がついて来たと思へて、腕を得て鬨を望むの書ひ、あと成城位に勝つてせめて勝星を残したいと考へるに至つた。拓大と當つたが之は前半一點をリードしたにもかゝらず、後半体力が物を云つて敗れたが、この辺から祈高の実力もそろ／＼高くかゝやうになつて、インター・カレッジではないが、武藏を本校に迎へて軽く一蹴し、ついで成城と前半三點、一時は四點もリードされながら之を同点とし、延長戦で勝ち、

翌日東高に快調を示して之を却け、七勝二敗で第三位となつた。かくして約一ヶ月にわたるインター・カレッジで、俄然今迄と見ちがへる程のプレー振りを示し、辻手の耐久力もつき、ハンドリングも比較的向上したので、愈々東京附近の高校をすべて破つた。一高を除く／＼余勢をかつてインター・ハイにはボロで全国制覇をなしとげんとの野望を以て、七月の第三回目の合宿を行つた。しかるにインター・ハイでは、戦前勿論強敵と目してゐたところの靜高に意外の敗をとつて、一同悲憤の姿をのんだのであつた。即ち六月、靜高は東高と戦つて八一五で敗れて居つたので左程でもないと思へて居つたのであつたが、いざ試合となつてみると、味方のフォワードはよく動いてゐたにも拘らず、バックは敵のスピードあるフォワードにやゝもすれば縦弄され勝ちの苦境に陥り、加へて中島のロング・シュートが物を云つて、得点を先取されたのであつた。戦ひの経過はくり返す程もないが、前半二失の靜高リードを、後半早くも一失を返したが、再三の敵の幸運に、遂に勝利は我々を見捨て去つた。この敗因は細かな原因としては数多くのことが考へられるであらうが、白分は次の数条をあげてみる。

- 一、敵をやゝ輕視しすぎたこと。
- 二、パスの不正確。
- 三、中島をノー・マークにしがちであつた事。
- 四、我々がハーフ伊丹主將が敵の寺田によつてマークされ、自陣深く退す事
たこと。
- 五、敵のゴールキーパーの逆手をつかなかつた事。

最大の原因は何と云つても「一」である。強敵とは云ひつゝも、心の中では何
買けつこないと楽観して居たのは否めない。これに対して實際的原因として
最も大をなしたのは、パスの不正確であつた。バックはマークは比較的堅固で、
球もよくとつたのであるが、おしいことにその後援がつかず、敵のスピード
あるフォワードにつぶされ、或は投げ得ても騎肩のために途中カットされる結
果となつて、フォワードに球が来なかつたと云ふ状態を来した。

次に得点の未取は、その試合の進行に多大の影響を有することは、対法大戦
で吾等すぬのことであり、又先取されて如何に苦境におち入るか、対成城戦
が例としてあげられる。しからは若し対靜高戦にして、先取得点を我が方が得

たならば、実力はほとんど相等しいと思はれる両者のいづれが勝つたかは向應
であり、おそらくは我方の勝に歸したであらう。それについて残念なのは前半
敵に与へたミスで、二つながら中島のロングシュートであり、之をノー・マーク
にしてロングシュートを容易ならしめを責任は、之をマークすべきセンターフ
ォワードが負めべきである。又ホープ伊丹主將は、過勞のためカイスターカレ
ツテ頃のドリブルの偉力影をうすくし、寺田に完全に封せられたかの如くに見
えてゐた。朝日スポーツの評にあつたかの如く、我がチームはスター・シス
テムの傾向が強かつたのであつて、その花形が封せられては如何とも仕様がな
かつた。甚だ残念であつたのは、後半一卓の差につめた時に、我方のシュート
は非常に数多かつたのであつたが、何れもキーパーの得手をついて、殊に一分
頃の伊丹主將のドリブル左コーナーシュート（ゴールに向つて）岡田氏のシュ
ート等、何れもキーパーの美技にはままれて得点にならなかつたのは、このキ
ーパーの弱さは向つて右であつて、味方の一個の得点は、右コーナーであつた事
から考へても残念であつた。これは平生練習の時の我がキーパー塩谷氏が全く
靜高のキーパーと反対であつた為、自然左コーナーシュートが多くなつた為か

とも思はれる。

以上本年度の前半期のポロの回顧を了へたのであるが、後半期に入つて七年前のポロがあつたが、これに對しては二年は出ずして二年以下の×ムバーで、去年に備へることにした。結果は全敗といふ番しからぬ次第であつたが、さりながら二年以下でどうやらすませたと云ふ事に意義があり、東高の鈴木正士をしてかく嘆せしめたのである。――「府高は三年生が、しかも四人のレギュラーが居なくても、どうにか試合をする事が出来る。それにひきかへて東高はどうだ。自分と増野がぬけたらば、一廿出来ないことである。」

本年度のポロは大体以上の如きが主なものであるが、これだけの戦績をあげると、決して、大なる力はいくつか働いてゐる。その第一は先輩などからの援助があつたかも知れぬが、三月合宿を全然ポロに専心した伊丹主幹の決断と、コーチャリーの招牌と云ふことである。

従来ポロといふものは、單に球をもち、投げるのであつて、どんなにしてやらうがおかまひなく、コーチャリーを買つて出るものもなく、簡單な助言をす

る人があつても、ルールをはつきり知つてゐるとは云ひかゆる状態にあり、又ちやんと練習したわけでもなかつた。故に今年の三月の合宿は、根本から教へてもらつたことが大きな収穫である。又コーチャリーの勸告によつて、関東学生リーグへ加盟したことも、ポロは聖職が大切だと云ふ立場から見ても、試合度胸やこまかいテクニクの修得にも大に益のあつたことであつた。

皆ポロに関心をもつてよく練習したことも、今日のポロの隆盛？を来す基となつたのであるが、就中三年生諸君の努力は素ばらしいもので、御覧のとほりレギュラー四人を教へる始末である。しかもその中の一人岡田氏は、シーズン初は練習不可能で、ひとり皆とおくれて練習開始せるにもかゝらず、レギュラーとしてフロートイングフォワードの役をつとめ、又不幸レギュラーに非ざりし福島氏は三月合宿中に盲腸炎を起して、その為シーズン殆んど一ぱい氷げなくなつてしまはれたのは、殆んどレギュラーたるべき人であつた故に惜しまれる。かく考へると今年の三年生の救けたあとは、正統の試合に出ているものは僅か四人残るのみで、甚だ心細いものである。

しかし今年を待つて実は未だ何も出来ないうなもの、寄集めがこれ迄になつ

たのであるから、来年度は皆白紙の状態として、今年位にはなり得る位と
 と思ふ。否今年以上になり得ると確信する。

そこで自分の有する考へとしては、来年度のボロに対する対策がいくつある
 のではあるが、こゝに思ひつくまゝにその一端を述べさせてもらふ。これは何
 れも今年度得るところの至験から得た私鬼であつて、勿論長きもあるであらう
 から、その真は叱正を賜はりたい。

一、スピード。我々は今年度ボロのみならず、スピードの方から云つても、
 劃期的な進歩を見たのである。さりながら未だそのスピードの足らざる
 をなげくのみである。即ち対靜高戦に於ては、たしかに靜高のスピード
 イなフオワード、ハーフに眩惑されて、ドリブルが利かなかつたやうな
 ことである。七八のメンバーがすべて二百米で二分五十四五秒コンスタ
 ント位でなければ、今年の靜高のスピードに拮抗するに苦心を要する。
 ボロは技術であるが、スピードの不利を緩和することが出来るが、や
 はり相当のスピードが無くてはならぬ。スピードに技術が加はれば、鬼
 に金棒式のものである。

二、耐久力。これは今年のインター、カレッジの最終の頃や、インター、
 ハイ頃の耐久力があるならば、文句は云へないことである。シーズン始
 めはとかく耐久力なく、直に浮いて動きが鈍くなるもので、それも今年
 殊に商大戦あたりで思ひ知つたことである。又耐久力なくて、バツクと
 フオワードが交替に前へ出たやうなこともあつたが、これは大いに注意
 すべきであつて、これをやると折角のチームのコンビネーションをかく
 おそれがある。これはシーズンにけなはになつた頃は改をまつたやうで
 ある。これは耐久力の向題である。

三、試合場数。至験は多い。試合を至て来た者程、技術も進み、耐久力もつ
 いてゐる幸を、今年インター、カレッジあたりで分つたことである。試
 合度胸と云はぬが。アガることか少く、無事に動かぬやうに次第に充
 練されて来る。

四、技術。今年の技術の進歩は相当以上に言ひまじいものがあり、大いに白
 け研究をつんだ人もあらうが、尚改良すべき点はいくつもある。第一は
 パスである。對靜高の苦杯を思ひ起す時、くやまれるのはパスの不正確

であつた。相手のスピードが早かつたとは云へ、殊にロングパスの修めさはどうだ。この疾は我がバツクは遺憾ながら、苦言を呈せざるを得ない。欲を云へば来年までに、水中でも球を二十米以上投げるやうになつてほしい。現在のバツクは十五米がやつこである。バツクのハスはフォワードの得実力を左右する。

第二はドリブルについてである。我々の間でドリブルが巧みなのは余りない。伊丹主将はドリブルがすぐれておたので、一軍のスターとして得実力が最も大であつた。ハーフのドリブルは非常に早い試である。スピードあるセクターフォワードに追はれて、しかもハーフ線をして敵ゴール前までドリブルせねばならぬ。フォワードもバツクも、ドリブルは共にもつとスピードをつけてゆかねばならぬ。

第三は出足でこの重要さは云ふまでもない。シースンが付けなはになるこ、みな至験をつんで大いにこの点は改良されておたか、もつと使つてよい。又之を相手側がする場合の防禦策ももつと考へるべきであらう。第四はシュートのことであるが、これはなるべく敵陣四角まで持つて

行つてなすべきで、ロングシュートは止むを得ぬ敗戦のときに非ざれば、濫用すべきではない。

88

以上いくつかのことをあげては来たが、未だ之以上にあるかも知れない。主として改良すべきと考へたことのみで、評は略に矢したかも知れないが、賞讃すべき疾は他にいくつもある。成城との延長戦、東高戦等、又静岡戦等のフォワードの動き、バツクの球をとること、及びマークの堅さ、等は將來ますます伸してゆくべき、目立つた美点である。之等の美点の中殊に最後のマークといふ件については、至験からわり出されたマーク法が、余りに極端になりすぎたかの様な感があり、折高はキレイでないの評に甘んせねばならなかつた。第二部の巧いと目するものは何れも拓大を除いてはキレイであり、例へば増野(東)山口泉(成)等は、その好例と云はねばならぬ。

競泳記録

(高等科)

本年度の競泳の進歩はベスト、フア
イフを一覽して察し得られる通り、高
昂を通じ、例年に比して著るしいもの
があり、来年度の希望を更に大にせし
め得る。

高等科はインター、ハイ迄のシース
ンを大体二期に分ち、前半はボロに、
後半は競泳にそのみるべき進歩がある。

▲商大予科との一戦(五月二十二日)
登んだ空気が青菜の茂みの下に行は

れ、先は好調に空を破る。△二百リレ

1(中川、田中、本岡、伊丹)ニ、〇
六、八勝つ。伊丹速し。△四百フリ
伊丹五、五一、四でトップ。米本六、
〇八、二で三位。

△二百ブレストは塩谷(三、一七、〇)
一位、中村(二十七秒)三位、堀内四
位になり喜ぶ。△百バツクは中川(二
七、七)で二位の他振はず。△百フリ
ーは伊丹(一〇、四)トップ、二位米

本(十一、八)田中(十五、四)は惜
しくも三位を逸す。△八百リレは伊
丹早く勝つ。(米本、石渡、田中、伊

丹)一一、二六四の好記録で試合終了。
▲対一高戦(五月二十九日)
五月二十日より入った合宿の第一戦

であるが、何ともし訳か、フリー陣は

数回系的好調を失ひ、バツク・ブレス

とも低調で、みす／＼勝てる試合を失

つた。戦後懇談会席上、府立マネーシ

メントをとやかく言はれてムクれる。

▲対商大専門部戦(五月三十日)

再び国分寺に遠征し、相当の好調に

な、はらず昨年の復仇ならず返り討を

食つた。伊丹の四百フリ一五分四十八

秒台、敗れたりと云へども、八百リレ

一の一一、一五、〇の府高新を出した

のは、この試合の収穫である。

▲三高校対抗

二百リレ一。東高一位二分一秒六の

大会新。府立へ米本、伊丹、田中、本

岡)二分五秒八、第二位。

四百フリ一。一位伊丹五分三九秒四

の大新、二位の増野とタツ子の差。唇

谷力氷空しく六位。

二百ブレスト。東高の錦織は五六秒

四の大新。塩谷一五秒で三位、中村二

十五秒四位。

百バツク。鈴木(東)一、一八、八の

大新。浦和の大場は存外早く、石渡早

くなく三位。本岡四位。

二百フリ一。米本は浦和の田中(一

秒)敗れて二分四一秒八(大新)で二

位。田中養一は五十六秒フラットで五

位。

八百フリ一。伊丹は四百の位を増野

にとり、一、二秒の差で二位、十二分五秒二（大新）本間清高と仲良く水ぎ、ラスト巨直つて第四位。

百フリ。米本あわて、コースにひつか、リムつか、リ、一分十三秒四、第四位。田中十七秒五五秒。

二百バツグ。東高の鈴木五八、六秒の大新。石渡二位。渡辺好調で浦和の大男二人を抜き、三分三秒八で第四位。

百ウレスト。東高錦織一、二〇、〇の大新。塩谷二七秒の二位。中村五位。八百リレー。東高一、十分五十秒六の大新。（米本、田中、石渡、伊丹）の府立は一分十秒六の大新で二位。

以上合計して東高八〇、府立六四、浦和四八、真の順。

インターハイ

七月二十一日
七月二十一日

六月下旬より、伊丹、塩谷、石渡、（フリー）米本、田中好調で、米本は幾多の府高新を出し、この調子ではインターハイで二〇、真は確実と歓喜して居る。併しふたがあいて見ると、全種目異常なレベルの向上ぶり、自校のみかタイムの昂るものではない事を痛感した。

第一日。八百米に伊丹、米本と出陣し、米本は一分三十秒台で入廷したが、この種目はおどろくべき向上をなし、

伊丹主将は遂に高井（ハ）に二秒の差で敗れ、遂に末勝に出場出来なかつた。二百ウレストも少差を以て塩谷専外となり、全廷落廷、百バツクも二百フリも全負落廷し、二百リレーも奮斗空しく五秒台の記録で専外となつた。末勝に米本出場し、後半高井（ハ）をはるかに抜き北村（ハ）に追つたが、少差を以て五位に甘んぜねばならなかつた。

タイム一、三一、〇。
第二日。四百米、伊丹は明白のボロを控へて自重し、桑権、米本五、二五〇の好記録で通る。二百バツクは石渡五秒台で通過し、百ウレストは塩谷ベタフライで軽く通過。百フリ通過者

なく。期待をかけた八百リレーは、米本、田中、石渡、伊丹のオーダーで全負優秀な速力をあげ、一一、四九、一で初の、而も鮮々たる継氷の通過をなし、陸の先輩部員歓喜した。

決勝はその後三十分にして行はれ、四百米米本健闘すれど、リレーの疲弊から五分三十一秒で六位となる。二百バツクも専外の石渡奮戦するも三秒で六位。百ウレストは於ては二十五秒末満の記録で塩谷おしくも五位。最後のそして最高の希望をもたれた八百リレーは、前回のメンバーを以て行はれ、米本、田中、と好調にす、及び、石渡猛烈なピツチで前半よくとばしたが、後

半ベツクの疲労から競へ水戸先行す。伊丹必死の馬力で水戸を遠つたが遂に逃げこまれて第五位に甘んじた。

七年制大會（九月五、六日）

第一、第二日合計して十名九位となつたが、皆それ／＼良好なタイムを出してゐたし、又ポロに主力を注いだのであるから、競走はこの程度で我慢せねばならぬであらう。伊丹、米本のくみ合せを工夫すれば、もう少し優位にほれたかも知れぬが、昨年度のレベルを想像して細かい配慮が行はれなかつたのも、競争の原因だつた。ガリレ一の向上に目すべきものがあり、来年度への期待も大になつたのですよ。

夏休みは例年にもまして尋常科は飛躍をとり、高等科は病氣や何かで不調であつたが、皮肉にも尋常は奇怪にもカップをのこし、高等にそれがころげ込れたが、いつ何故勝つたか判然とせぬ程混乱した勝ち方負け方であつた。伊丹、堀谷、石渡と増野の欠場で有利になつた米本は各々二位を得、二百リレーはオキツト、八百リレー第一位、三百メドレーは東高の失敗により一位となり、遂に優勝となつたが、及刻の乱獲とレースの混乱の上は、尋常科と入れ変つたカップでは、何の感興もな

い。叩き出したいとさへ、思はれた程の優勝であつた。

二百リレー、（府立、伊丹、田中、中川、米本）二分一秒五（府高新）二分

関東学生大会第三部は九月十、十一、十二日参加。夫々何とか得点して第三位となる。

四百フリー。米本、五分四十六秒四一着。石渡五分四十六秒四、一着。石渡五分四十九秒二の好タイムで之に次

▲第二回対二高戦（九月二十六日）

本年度最終の試合である対二高戦は

二百メドレーは、岡田三着六分十三秒八。

晴天の下に挙行され、担当の練習をつんだ府立は、それでも接戦を予想したが、二高は板の疲労とベツク陣の欠員

一着。中村二十四秒六で三着に迫つた。野本力氷及ばず六着。

により振はず一〇四——六六の大差を以て容易に昨年の復讐をとげた。この日二百リレーを始め、大つの府高記録

第二位、渡辺よくすべり、一分三十二秒二で第三位。四位高島。二百フリー。伊丹好調に二分三十四

秒七（新新）を出し、トップ。田中二
分五〇秒〇で三着、五着居谷。
八百フリー。米本十二分十四秒八で
トップ、岡田は十三分二十四秒で二着、
三着本間十四分五秒一と全勝し、新立
の勝利明日となる。
二百バツク。石渡好調に三、〇〇、
〇と久しぶりの新高新を出して一着、
渡辺小艇を活躍せしめて三分二十二秒
への好記録で三着、四着本間。
百プレス。塩谷バタフライでぐん
ぐん出て一着、一分二秒〇（新新）
中村前半出るも後半抜かれ、同時に三
着に入り、譲り合つて四着となる。代
役堀内おしくも二高の一人を陥りそこ

ねる。
百フリー。伊丹一分六秒五の新高新
で圧倒的トップ、田中十二秒台で水々
も四着、中川六位。
八百リレー。新立へ石渡、岡田、米
本、伊丹十分四十四秒四（新高新）
二高（渡辺、石川、永井、工藤）十一
分四〇秒。石渡岡田よくすべり、米本
もインター、ハイ当時回復旧し、伊丹
大好調で遂に四十四の大記録を生み、
先輩部長歡喜の中に、十二年度水泳の
シーズンは終了した。

（尋常科記録）

對成蹊戦

六月十日（土）晴

▲三百米×ドレーリレー

- ① 村立（村上、成合、山田）四分二

十五秒二

- ② 成蹊（小川、中島、川村）五分三

十四秒七

▲百米自由型（低学年）

- ① 佐藤（成）一分三秒八

- ② 村山（府）一分三秒八

- ③ 山口（府）

- ④ 久芳（府）

▲四百米自由型

- ① 中光 六分四十六秒八

- ② 稻山 六分五十二秒一

- ③ 野村 六分五十三秒六

▲五十米平泳（低学年）

- ① 田中（府）四十七秒五

- ② 内田（府）四十七秒七

- ④ 稻垣（府）

▲百米平泳

- ① 成合、一分三十三秒八、（自己新）

- ② 吉田 一分三十九秒八、（同）

- ③ 雁野 一分三十九秒九、（同）

▲五十米背泳

- ① 久芳（府）四十八秒四

- ② 内田（府）五十五秒〇

- ③ 桑山（成）五十五秒〇

久芳の進歩は目ざましいものである。

▲百米自由型

- ① 山田(符) 一分二十一秒五
 - ② 高井(符) 一分二十一秒七
- 木村失格、

府立の三人トツアを切つたが、木村と
なりのコースに出で失格となる。

▲百米平泳(低学年)

- ① 内田(符) 一分四十四秒二
- ② 田中(符) 一分四十四秒二
- ⑤ 稻垣(符)

▲百米背泳

- ① 村上(符) 一分三十三秒五
- ③ 米村(符) 一分五十七秒六
- 4. 上原(符)

▲二百米自由型、

- ① 中光(符) 三分〇三秒五
- ② 嶋山(符) 三分〇七秒二
- ③ 高井(符) 三分〇七秒八

全くワンサイド・ゲームで面白くない。
中光三分を切らなくては。

▲二百米リレー、

- ① 府立(木村、山田、高井、中光)
二分十七秒六
- ② 成蹊(田中、清水、三橋、木村)
二分二十七秒〇

得失

高学年 79	—	27	低学年 53	—	26
合計 132	—	53			

(A・N)

對市立一中戦

六月二十六日・土

何しろ初めての室内プールで、それに加へて水が冷たく、皆意気沮喪して練習タイムよりぐつと落ちて、今年も又彼等の前に降伏してしまつた。「あれが学校のプールだつたらなあ」とは買けたあとで我々が現した弱音である。

▲三百米×ドレーリレー

- ① 一中、(村田、金夾、今城)
四分十六秒〇
- ② 府立、(村上、成合、中光)
四分二十二秒二

▲四百米自由型、

- ① 阿部(一中) 六分二十七秒五、

- ② 高島(一中) 六分三四秒〇

註・二年生

- ③ 高井、(府立) 六分四十五秒七
- ④ 野村(府立) 六分五十二秒〇

▲二百米平泳

- ① 金夾(一中) 三分二十秒八
- ② 成合(府立) 三分二十五秒八
- ④ 雁部(府立) 三分三十三秒六

成合、金夾を追ふも終に及ばず、雁部もタツ子の差で堀口に敗れた。

▲百米背泳

- ① 中光(府立) 一分二十八秒八
- ② 大智(一中) 一分二十八秒八
- ③ 村上(府立) 一分二十九秒〇

村上 俄然トツラに出てが、ユール前五
米で村上、中光、大智の三着並びほと
んど同時にユール・インす。

▲百米自由型

- ① 岡山 (一中) 一分十八秒〇
- ② 山田 (府立) 一分二〇秒〇
- ③ 木村 (府立) 一分二一秒二

▲二百米自由型

- ① 今城 (一中) 二分五秒六
- ③ 中光 (府立) 三分〇秒〇
- 4 高井 (府立) 三分一五秒四

▲百米平泳

- ① 金麦 (一中) 一分二九秒八
- ② 成合 (府立) 一分三三秒〇

4 吉田

成合 善戦すれど二着、吉田水きのんで
レースを席る。

▲二百米背泳

- ① 大智 (一中) 三分一八秒二
- ② 村上 (府立) 三分三秒六
- 4 又芳 (府立)

▲八百米リレー

- ① 一中 (今城、岡山、阿部、高島)
- 十一分五十六秒四
- ② 府立 (野村、山田、中光、高井)
- 十二分二十九秒〇

結局、49 | 31で我々の大敗にまじり
しまつた。

(A・N)

對青学戦

八月三十日

我々は強敵青学を我々のもつとも虫
のりきつてゐる夏季練習中に本校に
迎へ、去年の仇を討つたのである。こ
の試合に於て、四つの尋常科新記録を
生かすことが出来た。

▲二百米×ドレトリレー

- ① 青学 (小菅、津田、本田)
- 四分〇一秒〇
- ② 府立 (村上、成合、中光)
- 四分〇五秒九 (府高並尋新)

小菅の快速には如何ともしがたく終に
負る。とは云へるに堂々たる記録であ

る。

▲四百米自由型

- ① 野村 (府立) 五分三七秒〇 (尋・新)
- ② 水場 (青) 五分五六秒八
- 5 稻山 (府立) 六分〇七秒六
- 6 草下 (府立) 六分五四秒六

野村断然他を抜いて驚異的記録を出し、
稻山は本田、小菅等とせつたが、タツ
子の差は五着。

▲二百米平泳

- ① 成合 (府) 三分一八秒二
- ② 雁部 (府) 三分三〇秒〇
- ③ 吉田 (府) 三分二秒六

プレスト・トリオ一、三着をとり、大
勢好転す。

▲百米自由型

①中光(符) 一分十一秒四

②本田(青) 一分十三秒〇

④山田(符) 一分十七秒二

⑤木村(符) 一分十七秒三

中光短距離への転向ぶり鮮かに一着、山田、木村善戦す。

▲百米背泳

①小笠(青) 一分二秒六

②村山(符) 一分二秒七

③高井(符) 一分二秒九

⑤矢沢(符) 一分三秒八

フリーより転向したての高井、三十秒を切つて三着に入り、矢沢又よく奮闘す。

▲八百米自由型

①野村(符) 十一分五秒八(鼻・新)

②中光(符) 十二分三秒六

③木場(青) 十二分四秒四

⑥霜山(符) 十二分五秒四

野村又も鼻背科記録を出す。中光、霜山又よくた、かひ、敵陣に声なし。

▲八百米リレー

①村立(野村、木村、霜山、中光)

②青学(木場、本田、小笠、山田)

⑤矢沢(符) 十二分〇秒六

終に六四対五三を以て雪辱成る。

(A・N)

七年制大会

第一日。

▲三百メートル決勝

①村立(村上、成合、中光)

④・十・四(大会新)

他は予選不通過者一人のみ。

第二日

▲二百米リレー決勝

①東高、②成城、③成蹊

村立武蔵は矢格、無反則を信じた我々は、異常な興奮が起つたが、よく抑へ悲壯な覚悟を以て追撃戦に向つた。

▲八百フリー

①野村、十二分十八秒八(大会新)

4.霜山

▲百フリー

①中光、一分十二秒六

⑤山田

⑥木村

▲二百プレス

①成合、三分十八秒四

④丁部

⑤内田

▲百バツク

②村上、一分二十八秒六

④高井、⑤矢沢

▲四百フリー

①野村、五分五十三秒八

④霜山

- ▲ニ百フリ
- ① 中光ニ分四十九秒
- 5 山田
- ▲ニ百バック
- ② 村山 三分ニ〇秒四
- ③ 高井 6、矢沢
- ▲百プレス
- ① 成合 一分ニ九秒ニ (大会新)
- 5 厂部、6 吉田
- ▲八百リレ
- ① 村立 (野村、山田、稻山、中光)
- 十一分三八秒四 (大会新)
- 2. 東高、3. 成城 4 成蹊、5 武蔵
- 一、東高九十五尺、二 村立九十四尺
- 三 成城四〇尺、四 成蹊十二尺、五 武蔵
- ▲一、二年二十五米背泳
- ③ 大祖内 (二甲) 一九秒〇
- ① 大祖内 (二甲) 二一秒〇
- ② 久 芳 (二甲) 二一秒〇
- ③ 内 田 (二乙) 二一秒八
- ▲一、二年五〇米平泳
- ① 三 添 (一甲) 四八秒四
- ② 松 浦 (二乙) 四八秒六
- ③ 内 藤 (一甲) 五〇秒八

伊丹	1 = 06.5	(新)
米本	1 = 07.2	(新)
中光	1 = 11.2	(新)
田中	1 = 11.8	
本間	1 = 15.0	
mean	1 = 10.34	

米本	2 = 32.8	(新)
伊田	2 = 34.7	(新)
野村	2 = 38.2	(新)
中光	2 = 42.0	
石麦	2 = 42.2	

mean 2 = 37.98

百米自由型及二百米自由型

十三年度五傑

- ▲一、二年二十五米背泳
- ③ 大祖内 (二甲) 一九秒〇
- ① 大祖内 (二甲) 二一秒〇
- ② 久 芳 (二甲) 二一秒〇
- ③ 内 田 (二乙) 二一秒八
- ▲一、二年五〇米平泳
- ① 三 添 (一甲) 四八秒四
- ② 松 浦 (二乙) 四八秒六
- ③ 内 藤 (一甲) 五〇秒八

- ▲ニ百フリ
- ① 中光ニ分四十九秒
- 5 山田
- ▲ニ百バック
- ② 村山 三分ニ〇秒四
- ③ 高井 6、矢沢
- ▲百プレス
- ① 成合 一分ニ九秒ニ (大会新)
- 5 厂部、6 吉田
- ▲八百リレ
- ① 村立 (野村、山田、稻山、中光)
- 十一分三八秒四 (大会新)
- 2. 東高、3. 成城 4 成蹊、5 武蔵
- 一、東高九十五尺、二 村立九十四尺
- 三 成城四〇尺、四 成蹊十二尺、五 武蔵
- ▲一、二年二十五米背泳
- ③ 大祖内 (二甲) 一九秒〇
- ① 大祖内 (二甲) 二一秒〇
- ② 久 芳 (二甲) 二一秒〇
- ③ 内 田 (二乙) 二一秒八
- ▲一、二年五〇米平泳
- ① 三 添 (一甲) 四八秒四
- ② 松 浦 (二乙) 四八秒六
- ③ 内 藤 (一甲) 五〇秒八
- ▲三百米自由型
- ① 田中 (二甲) 三十七秒二
- ② 内 田 (二乙) 四十一秒一
- ③ 三 添 (一甲) 四十二秒〇
- ▲三年百米自由型
- ① 三 添 (一甲) 二一秒六
- ② 内 藤 (一甲) 二一秒九
- ③ 久 芳 (二甲) 二一秒八
- ▲一、二年二十五米自由型
- ① 村山 (二乙) 一七秒二
- ② 久 芳 (二甲) 一八秒二

十一日
▲尋常科校内大会は、九月十八日(土)
に挙行、各学年の重宝ものは、

つてもバタフライの研究の余地あり。
 相当の躍進を見た。百の百の記録によ
 高率は音きのぞいて不調。尋常科は

塩成	谷	1 = 23.0	(新)
成	合	1 = 29.2	(尋)
吉	田	1 = 31.2	
中	村	1 = 31.5	
堀	内	1 = 32.2	
mean		1 = 29.42	
(参考伊丹 1 = 26.4)			

塩成	谷	3 = 12.4	
成	合	3 = 14.4	(尋)
雁	部	3 = 18.6	
吉	田	3 = 21.2	
中	村	3 = 24.6	
mean		3 = 18.24	

四百米胸泳及三百米胸泳



今年のフリーの躍進は真に劇的であ
 った。

米伊野中	本丹村渡光	5 = 24.0	(府)	(新)
		5 = 37.0	(府)	(新)
		5 = 37.0	(府)	(新)
		5 = 49.2	(府)	(新)
		5 = 51.4		
mean		5 = 39.72		

米伊野中	本丹村渡光	11 = 28.0	(府)	(新)
		11 = 32.4	(府)	(新)
		11 = 53.8	(府)	(新)
		12 = 06.8	(尋)	(新)
		12 = 50.0		
mean		11 = 58.2		

(二) 四百米自由型及八百米自由型

背泳の向上も目ざましいが、副業の人
 々に中堅をしめられておるのが脆弱点
 である。

中川	1 = 23.0
石渡	1 = 24.8
中光	1 = 25.5
村上	1 = 26.0
米本	1 = 27.0
mean	1 = 25.26

石渡	3 = 00.0	(府)	(新)
村上	3 = 09.8		
中光	3 = 10.4		
中川	3 = 17.0		
米本	3 = 17.4		
mean	3 = 10.92		

三百米背泳及二百米背泳

10、二百米継泳	二、〇一、五	(伊丹、田中、中川、米本)	(高)	十二・九
11、三百米混継泳	一、一〇、八	(天野、中川、伊藤、米本)	(尋)	十・九
	三、五七、〇	(中川、堀谷、伊丹)	(高)	十二・八
	四、〇五、九	(村上、成台、中光)	(尋)	十二・八

編輯後記

先づ当方の怠慢より出版がこんなにおそくなつた事をお詫しなければならぬ。原稿提出より相当の期間の経過したものが多いか、お許しねがひたい。

いつもながら井上部長の玉稿と、丹沢先輩からの御寄稿を感謝する。御見のどほり四号には文化的な原稿が多く集まり、運動に於ける文化的向上の提唱が空虚なものでない充実したものであることを、厳として実証したことは喜ばしい限りである。だが我々はこれに満足してゐるのではない。我々のあくことなき進求精神は更に、進歩せる黒汐を生み出すことであらう。

(尚記録面の少数であつたのは、記録の散逸によるものであることをお断りしておく (中村))

黒潮

第四号

東京市渋谷区上通り三三六番地

印刷所 双葉書寫堂

